
ディバインナイツ ~星語りの物語~

イーヴァルディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デイバインナイツ ～星語りの物語～

【Nコード】

N2581T

【作者名】

イーヴァルデイ

【あらすじ】

世界には理不尽が多い。その理不尽を戦うために彼らは剣を取る。世界の真理を彼が知るその日まで。

デイバインナイツ - the origin - とは時代が違います。こちらにも新たな未来を求めてを優先して書くので長期休載があるかもしれません。現時点ではまだまだありませんが。

プロローグ（前書き）

新たな未来を求めてがスランプ中なので気分転換をかねて書いていきます。

主人公最弱には理由があつて、三話目にて明かします。

プロローグ

最初に科学の時代があった。

科学の進歩によって世界は発展したが争いがなくなることはなかった。そして、その争いがいつしか大きなものとなり科学の時代は滅んだ。

続いて魔科学の時代があった。

科学の時代以上に発展した文化を持ちながらも、外敵の侵攻によって滅んだ。ただ、科学の時代と違い、数人による英雄部隊が結成された。

その名もディバインナイツ。リーダーが神のごとき強さを誇ることから名づけられた部隊は世界の崩壊を救った。

そして、神威の時代があった。

人が神によって制御され神によって遊ばれていた時代。最終的には神に反逆した人によって滅んだ。

神が滅んだ後の世界は神剣の時代だった。

神の力によって作られた武器である神剣を使い人は争った。文明レベルすら維持できないほどに。

そして、今の時代。名はまだない。だが、その世界は滅びに瀕していた。

今までとは戦争でも、外敵でもない。新たな敵によって。

星語りの物語

それは世界の命運をかけた三人の少年とその仲間達による物語である。

序話 失意の少女（前書き）

まずは序話から。ちなみに、主人公は次の話から出ます。

序話 失意の少女

失った。たくさんの大切なものを失った。

私は自分の手から愛刀をその場に落とす。降り注ぐ激しい雨の影響で地面に愛刀が転がった音はしなかった。でも、周囲にいる人は警戒している。

姿から判断して山賊だろう。呑気なものだ。世界は滅ぶか滅ばないかという瀬戸際だと言つのに、彼らは呑気に山賊をしている。

一体、私のしていたことはなんだったのだろうか。

私の頬を温かい何かが濡らした。涙だ。いつの間にか私の瞳から涙が流れている。

「おい、誰だ？」

山賊の一人が警戒をしながら私に声をかけてくる。でも、私は答えがない。いや、答えられない。

もし、この状況で口を開こうものなら出てくるのは情けないほど泣いた声だろう。そんな状況にするわけにはいかないのだから。

私は愛刀を拾い上げた。土で汚れたそれを横に一降りすれば全ての泥が落ちる。私はそれを鞘に収めた。

「誰だって聞いているんだよ！」

「黙れ、下郎」

私の口から出てきた言葉は恐ろしいくらいまでに冷めた声だった。ほんの前まで死闘を繰り広げていたからか、それとも、

「ここで死にたいバカな人は向かってくればいい。私は、全てを壊すから」

「て、てめえ！」

山賊の一人が走る。その速度はまるで牛の様に遅かった。私は愛刀の柄に手を乗せる。

「私は」

鞘から刀を走らせた瞬間、周囲の天気が変わった。雨から雪へ、そして、雹へ。

向かってきた山賊の血でぬれた愛刀を一降りして血を飛ばす。私の体に雹が当たり、体中に微かな傷を作っていく。

「逃がさない」

この日、季節外れの雹が観測された山中ではこの地域最大の山賊勢力が氷漬けにされて見つかったらしい。

第一話 冒険者の少年少女（前書き）

主人公が登場です。後、後書きでプロフィールを書いていきます。

第一話 冒険者の少年少女

町の酒場は独特だ。酒場というより情報屋と言っているのかもしれない。街の酒場には重要な情報が集まりやすいのは今では常識だ。最初の頃はそれを知らず探すのが大変だったけど。

「いらっしやい」

だけど、この酒場はまだ昼に近い時間だから人がほとんどいなかった。マスターの声に軽く会釈してオレはカウンター席に座る。

「飲み物はなんにします？」

「ミルクでお願い。もうすぐ来る連れの方がお酒を頼むから」

「わかりました。それにしても、見ない顔ですね。冒険者ですか？」

9

「まあね。まだ初めて半年の新人だけど」

出されたミルクを口に含む。人工的に作られたミルクだけど味は悪くない。むしろ、人工ミルクの中じゃかなり高品質なものだ。

「マスター、ココロダ山の話聞いていいかな？」

ココロダ山は今滞在している町のすぐ南の方角にある大きな山だ。二ヶ月ほど前までは大きな山賊弾が縄張りにしており、何度も王国の討伐隊が出たが何度も返り討ちにあつたとされる山。

ここを要塞にすれば攻めにくい地形なのだろう。

「もしかして、あそこに行く気ですかい？」

「まあね。依頼を受けたから」

そう言ってオレは依頼の表をマスターに渡した。

これは冒険者ギルドが発行するクエスト受諾表だ。そこに書かれたクエストをしっかりとこなせば報酬がもらえる。国もバックについているため上級者の冒険者は引退してからかなり裕福に暮らしているらしい。

「ココロダ山の調査。300万エルト？ 確かにあの山に入ったものは未だに生きて帰った者はいませんが」

「やっぱりなんだ」

二か月前に山賊団が全滅してからあの山に入ったものは誰も帰ってきていない。冒険者も、傭兵も、軍隊も、民間人も、誰も帰ってきていない。

だから、300万エルトなのだろう。二年間ほど遊んで暮らせる大金を報酬にしている。

すると、酒場のドアが開いた。オレとマスターがそちらを振り向き、マスターの顔が固まる。

そこにいたのは波打った金髪の少女だ。背の高さは140cmほどでかなり小柄だが、その背中には160cmほどの杖が背負われており、服装は冒険者御用達のジャケットとズボン。そして、身につ

けている軽装甲には一つのエンブレムがある。

二本の剣を交差してその背景に翼を広げた鷹がいる。

「クリス、遅かったね」

「すみません。お父様の使いの方とお話していたので。あっ、お酒、アルコールが弱めでマスターのおススメをください」

「は、はい。かしこまりました」

「硬くならないください。今の私は冒険者ですから」

マスターがカチコチになりながらカクテルを作ろうとする。その様子を見ながらオレは小さくため息をついた。

「クリス、それは無理だって」

「ですよね」

クリスはしょぼんと視線を下げた。オレはミルクの入ったコップを持ち上げる。

「どんな話だったの？」

「いつもの話です。元気にしているのかとか、お金は大丈夫かとか」

「いつも通りだね」

クリスの父親は親バカと誰もが言うくらいに親バカだ。でも、自分

のやることを全く見失わずに親バカをやるのだからその姿勢は誰もが尊敬している。

オレだってああいう親になれたらいいけどね。

「レイは何か情報が聞けました？」

「やっぱり、噂は本当みたい。どうする？ オレ一人で行こうか？」

「レイ一人で行けば行方不明者の仲間入りです。私も行きます。リスクを承知で依頼を出しましたから」

オレが受けたクエスト。その依頼を出したのはクリスだ。

ココロダ山の調査を行うと書いてあるが、正確にはクリスと一緒に調査を行うということになる。だから、大人数ではなくソロで冒険者をやっている人。なおかつ、下心なくクリスと接することが出来る人。そして、年齢の近い人物。

その全てに合致したオレがクリスと一緒に言うことになった。

「カクテルでございます」

マスターがクリスにカクテルを渡す。クリスはそれを受け取って口に含んだ。

「あつ、おいしい」

「ありがとうございます、姫様」

「本当においしいです。レイ、調査が終わったらまた来ませんか？」

マスターが呼んだ、姫様という言葉。クリスの本名はクリステイナ・アピニオン。二本の剣と背景の鷹が印象的なアピニオン王家の第三王女だ。王位継承権は大体12番目くらいだからこういうことが許されている。

オレは頷いた。

「そうだね。マスター、他にココロダ山の情報はない？」

「地図なら。それ以上のものはさすがに集まりません。帰って来た人がいないので」

そう言うとマスターは地図を渡してきた。オレはそれを受け取ってクリスと一緒に見る。

深い溪谷やら高低差の大きな場所など、一目見るだけでココロダ山がどれだけ動きにくい地形かわかる。でも、一か所だけ存在する空白の場所。

「ここはなんでしょうか？」

「多分、山賊の本拠地付近じゃないかな？ 山賊が近くにいたから調べることが出来なかった。今では誰も帰らないから空白」

「確かにそう考えれば納得できますね。でも、どうやって行きます？ 真正面からでは危険性が高いと思うので」

「そうだね」

オレは地図の全体を見た。一番簡単なルートは山の中にある道を使うっていけばいいけど、それ使えば行方不明になるのは確実だろう。だったら、別のルートで行かないと。

「このルートかな」

オレが指さしたのは溪谷だった。

「このまま川をさかのぼり上流に行く。そうすれば何か分かるかもしれない」

「レイ、ここは歩けるような場所じゃないと思うんですけど」

地図上の表記だと確かに歩くような場所じゃない。でも、オレは笑った。

「オレ達は冒険者だぜ」

第一話 冒険者の少年少女（後書き）

主人公

レイ・ラクナール 17歳

身長170cm 体重59kg

武器：片手剣

ポジション無し

得意魔法属性無し

第二話 眠り姫

ココロダ山にある溪谷。そこは断崖絶壁で囲まれており、そこを歩くことは無理に等しい。でも、オレ達はそこを歩く。

ロッククライミングしながら。

「レイ、帰ったら怒りますからね」

「大丈夫だって。ここを通っていたら見つからないから」

「絶対に見つかりませんけどね！」

クリスが震える手で岩肌を掴み、少しだけ出ているでっばりに足を乗せて少しずつ進んでいく。

オレは岩肌を蹴った目星をつけていた足場に乗り移った。クリスもすぐに乗り移ってくる。

「ここは」

「昔に使われていたと思う天然の道。多分、崖崩れでもあったんじゃないかな」

地図を見ていたら気付いたけど、断崖絶壁の途中から道があった。そこまでたどり着けば目的の場所まで結構早く着くことが出来る。でも、足場はかなり不安定だ。

オレはクリスの手を握って歩き出す。

「私が前に出ましようか？　もし、敵が出てきたなら」

「大丈夫だから。それに、こんなところで戦闘になったら落とした方が早いよ」

「そうですね」

こういう道幅せまい場合は剣を振り回すことは難しい。だから、こういう特はルールなしのストリートファイトみたいな感じで行けば十分だ。

それでも、危険なことには変わらないけど。

「さてと」

オレは前を見る。どうやらこの天然の道も終わりみたいだ。それに、そろそろ中央に近づいているから上っておかないと見失う可能性もある。

「ここを上るよ」

「ここを、ですか？」

クリスが見上げたのは断崖絶壁。もちろん、ロッククライミング命綱無しバージョンだ。落ちれば確実に死ぬ。オレは確実に。

そんな場所を見上げながらクリスが少し遠い目をして語りかけてくる。

「浮遊魔法を使っているのですか？」

「クリスは浮遊魔法でいいよ。オレは上るから」

そう言うとおレはすぐに岩肌を手をかけた。そして、器用に登っていく。冒険者だからということもあるけど、オレ自身がロッククライミングが大好きで昔住んでいた場所だとよく崖登りをしたからだ。セリアとガウスは無事かな？

でっぱりを上手く掴み、体を上げてでっぱりに足を乗せる。どれくらいしたかわからないが、気づけば崖を登り切っていた。渾身の力で体を上げて周囲を見渡す。

周囲にあったのは信じられない光景だった。氷の彫像となった木々、木々だけじゃない。人もいる。服装から考えて冒険者だ。

「どうかしました？ えっ？」

オレの後を追ってクリスが昇ってくる。杖の上に腰かけて。そして、目の前の光景を見て完全に固まっていた。

オレは氷の彫像に近づき、凍った木々に手を触れる。そして、眉をひそめた。

「冷たくない？」

そう言えば、寒くもない。こんなに氷が存在するなら周囲一帯がかなり寒くても違和感がないはずなのに。でも、今の気温は他の場所と全く変わらない。

触っても冷たくないということは、温度自体が動いていないということだろう。

「氷属性の魔法かな。でも、ここまで大規模に魔法を展開できるのは神剣じゃないと無理だと思うけど」

「レイ、これは、一体何なのですか？」

クリスも不思議に思っているみたいだが、怖がって氷の彫像に触らない。でも、今回はそれがいいともう。きつと、この木々は完全に罨だから。

オレは木から手を離す。そして、少々赤くなつた掌を見ながら小さく息を吐いた。

どうやら、ココロダ山に入ってから誰も帰ってこないのはこれが原因らしい。魔法の術式の根源さえ分かれば十分だけど、それをどこにあるか探さないと。

「クリス、氷には絶対に触れないでね。確実に呑みこまれるから」

「もしかして、水と炎と氷の魔法合成ですか？」

「多分ね」

そんな高性能な魔法を相手が使える以上、こつちが下手に手を出せばどうなるかわからない。だから、警戒しながら行かないと。

オレは腰から剣を抜いた。安物の片手剣だ。初心者の冒険者が身に

つけるアイテム。ちあみに、冒険者養成学校の卒業時にもらったものをずっと使っている。

クリスが背後で杖を背中に収めたのがわかった。こういう状況で魔法を放てばむしろ気づかれる可能性があるから妥当な判断だ。

歩く。オレは周囲の木々に触れながら、微かに方向を読み取りつつ歩く。クリスは周囲の氷に触れないようにしながら。

そして、木々が開けた。そこに広がっていたのは一面の花園。ただし、氷の彫像だ。

「うわっ、綺麗」

クリスが小さくつぶやいた。感嘆の声の意味がわかる。確かにこれは綺麗だ。綺麗だけど、これに触れたならオレ以外は凍るだろう。こういう時だけ自分の能力に感謝だ。

よく見渡してみると花園の中央に何か突き刺さっている。細い剣の様なものだ。レイピアとは少し違うような。

「クリスは待機していて。オレが向かうから」

「はい。気を付けてください」

オレはクリスに頷いて氷の花園に足を踏み入れた。それと同時に服越しに嫌な感覚が襲う。氷の花に触れた場所が凍っているのだ。その凍った場所が冷気を伴ってオレの足に当たっている。

オレは小さく息を吐いた。そこまで冷たくはないが、長居するのは

危険だろう。

氷の花をかき分けて前に進む。幻想的な光景なのだが、実際の効果を知っているならそれは全く幻想的じゃない。一体、何があるんだ。

そして、オレは中央にたどり着いた。ズボンの半分くらいは氷に浸食されているが動き回っていたら壊れるだろう。でも、それよりも大事なことが目の前にあった。目の前にあるのは一本の刀。確か、東方の騎士が使う切れ味抜群の武器だ。それが地面に突き刺さっている。そして、

地面に横たわる少女。

少し年上なのかもしれない。微かに青みがかった白い髪に可愛らしい顔。クリスと比べてもいい勝負だろう。その少女が横たわっている。

身につけている服装は甲冑。鈍い光を放つ甲冑だ。新品とは違い使いこなれた感じがする。その甲冑の上でまるで祈るように手を組んでいる。

オレはその少女に手を伸ばしていた。どうしてかわからない。でも、伸ばさなければならぬような気がしたから。

少女はどうやら眠っているらしく、まるで眠り姫とも言わんばかりの状況だった。

オレの手が少女の頬に触れる。それと同時に何かが碎ける音が鳴り響いた。まるで、結界を破壊した時と同じような音が。

少女の目が開くと同時に少女が起き上がった。刀を手に取りその刀をオレに向かって振ってくる。

殺される。

そう思った時にはオレは後ろに跳んでいた。でも、手に持つ剣が刀に捉えられスパツと切断された。

地面に着地すると同時に刀が首筋に当てられる。

「あなた、何者？　そうして、私の固定結界を破壊して安眠を破るの？」

第二話 眠り姫（後書き）

クリステイナ・アピニオン 16歳

身長139cm 体重??kg

武器：杖

ポジション：センター

得意魔法属性：全部

第三話 人類最弱男（前書き）

レイが最弱に対して刀を持つ少女はかなり強い設定です。最弱と最強の対比を書きたかったのと、その最弱視点からの物語を書きたかったからです。そげぶの人のような強力な能力なんてない文字通り最弱ですよ。

第三話 人類最弱男

その言葉にオレは答えることを忘れていた。少女の声は何故か心地よささえ感じていた。刀さえ当てられていなければもっと良かっただろう。

半年間連れ添っていた愛剣は使いものにならない。

「君は？」

思わずそう言っつてしまい刀が首筋を微かに斬るのがわかった。本当に微かなのでチクツとしたぐらいで気にはならないが。

すると、少女が微かに眉をひそめた。

もしかして、何か作用させるつもりだったのかな？

「聞いているのは私。あなたは何者？」

「オレはレイ・ラクナール。冒険者だ。クエストのためにこの山の調査に来た」

「そう」

少女が刀を引く。そして、刀を鞘に収めた。

「なら、今すぐ去りなさい。これ以上ここにいたら」

「残念だが、ここから帰らせねえよ」

急に響き渡った男の声にオレは振り返った。そこには首筋に剣を当てられたクリスの姿。その後ろには顔に大きな傷痕を持つ男がいる。クリスが油断している最中に近づかれたか。

「ようやく見つけたぜ。親分達を殺したガキが。こいつは王家の者だから使い道はあるが、お前らはない。だから、この場で死んでもらうぜ」

周囲を見渡せばいつの間にか囲まれている。ただし、ほとんどがオレとあまり変わらない年のようだ。これなら少しは勝ち目がある。

オレは使いものにならない剣を構えた。

「オレはクリスを助ける。だから、君は逃げろ」

「はあ。あなた、自分の力がわかっていないの？」

「わかっているさ」

オレは地面を蹴る。全速力で蹴ってクリスを助ける。

「バカが。やれ」

その声が聞こえた瞬間、オレの体は地面に叩きつけられていた。肺の中にある空気が全て吐き出される。

地面に叩きつけられたオレの背中に誰かが乗ったのか痛いほどの重みを感じる。

「なんだこいつ？　今ので反応出来ないのかよ」

多分、背中に乗っているのは戦闘をほとんど体験したことのない人だろう。クリスならどうにかするかもしれないけど、オレは絶対に無理。

相手が身体強化魔法が使える時点で勝ち目はない。

「弱いつてレベルじゃないだろ。冒険者のくせに」

確かに冒険者の中じゃ冗談抜きで最下位だけだな。だけど、これでも冒険者なんだから意地ぐらいは、

「起きるな」

頭が勢いよく踏まれる。頑丈さが取り柄のオレじゃなかったら確実に死んでいたような力。

「へえ、これでも死なないのかよ。だったら」

剣を抜く音。多分、このまま剣を振り下ろされて終わるんだろうな。

「はあ。あなた、本当に弱いよね」

その瞬間、背中に乗っていた重さが消えた。オレはすぐに起き上がり周囲を見渡すと、氷の花園の中に氷漬けにされた人がいる。

まるで、来る途中で見たのと同じ姿。

「今の速度は止まって見えるほどよ。まあ、あなたなら納得だけど
そう言いながら少女が刀を構える。」

「手伝ってあげる。あなたに聞きたいことがあるから」

「身体強化系を普通に使える人がいるなら大いに助かる。今は」

オレは地面を蹴った。向かうのはクリスがいる方向。

「クリスを助ける！」

「わかったわ」

その声が聞こえた瞬間、少女の姿はクリスを捕まえている男の横に
いた。男の顔が驚愕に染まるのと同時にこめかみに柄がめり込み男
が吹き飛ぶ。

吹き飛ぶと同時にクリスの体は少女の腕の中だった。

「大丈夫？」

「あ、はい。ありがとうございます」

「よくもゴルメさんを！」

近くにいた周囲で一番若い、12歳くらいだろうか、少年が剣を振
り上げる。オレはすぐさま間に入り込んで剣を受け止めたつもりだ
った。

断ち切られた剣が手から叩き落とされる。そして、翻された剣先が鎧だけを半ばまで斬っていた。

これが身体強化をしたのとしていないのとの差か。

「レイ！」

クリスが杖を構えた瞬間、圧縮された空気の塊が少年を吹き飛ばしていた。

オレは一步後ろに下がる。

「無事ですか？」

「だ、大丈夫だよ。クリスこそ無事？」

「私は大丈夫です。レイは最弱なのですから無理はしないでください」

心配してくれるのはありがたいのだけど、最弱と言われる度に胸に何か突き刺さるのは気のせいだろうか。いや、気のせいであって欲しい。

最弱なんてとうの昔に受け入れたのだから。

「お願いですから。お願いします」

クリスの可愛いらしい瞳からはいつの間にか涙が落ちていた。オレは一瞬だけ目を伏せて、そして、クリスの頭を撫でた。

「大丈夫だよ。オレは昔から頑丈だから。クリス。今は周囲の敵を」
「それなら心配には及ばないわ」

周囲を見渡して初めて気づく。周囲にいたはずの男達が全員氷漬けにされているのを。

クリスが息を呑んだのがわかった。オレはクリスを背中にやる。

「君は、何者だ？」

「そうね。その前に」

少女が刀を振る。反応することは出来なかった。首筋に刀身が食い込んで血が流れるのがわかる。

「レイ！」

クリスの叫びと共に少女が刀を引いた。

「やはりね」

「どづいつつもりですか!？」

クリスがオレの前に杖を構えながら立つ。そんなクリスを少女は冷めた目で見ていた。

首筋に手を当てると傷口はそれほど酷くはないが、血がかなり流れている。そして、傷口の近くが微かにヒリヒリする。もしかして、

「オレを試したのか？」

「ええ、そうよ」

少女が刀を鞘に収めた。

「私の名前はフィーナ・ベルフォルト。あなたに尋ねるわ、世界最弱の人間」

やはり、最弱と言われる度に何かが突き刺さる。確かにオレは最弱だけだ。

「一般人より弱いあなたはどのようにして戦うの？」

「レイがどうしても一般人より弱いと決めつけるのですか？」

クリスがいつでも魔法を唱えられるようにしながら少女、フィーナに尋ねる。フィーナは微かに笑った。

「あなたには質問していないわ」

その瞬間、クリスの持つ杖が半ばから切断されていた。クリスが一步後ろに下がる。

もしかしたら、クリスですら刀の軌道が見えてなかったのかもしれない。オレは全く見えなかったけど。

「次に口を開けば氷の彫像にしてあげる。大丈夫よ。痛みは一瞬だから」

クリスの首筋にいつの間にか抜かれていた刀が当てられていた。

オレはその刀を掴む。

「クリスには手を出すな。フィーナと話しているのはオレだろ？」

指はむちゃくちゃ痛い。むちゃくちゃ痛いけど、こうでもしなければ何かした時にクリスが死ぬ。そんなことなんて絶対に嫌だ。

だから、オレは刀を手取る。

「離して」

「離さない。フィーナがクリスに手を出さないと誓うまで」

「わかった。誓うから、離して」

オレは手を離した。すぐにクリスが治癒魔法をかけてくれる。

握った時は必死だったからわからなかったけど、かなり深くまで裂けていた。後少しで指が落ちていたかもしれない。

「バカ」

クリスが小さく呟く。心配してくれることが今は嬉しい。

「レイ、あなたはこの世界の誰よりも弱いはずよ。なのに、どうして戦おうとするの？」

「どうして？ わからない。わからないけど、クリスティナは少し

の間でも仲間だから。だからかな。オレの能力はフィーナもわかっていると思う」

フィーナが作り出した氷を触った存在を凍らせる結界魔法。もしかしたら、フィーナは誰とも会いたくなかったのかもしれない。

でも、オレとクリスはフィーナと出会った。

「オレをオレとして見てくれる。クリスはそういう子なんだ。だから、助けたいと思った。例え力が無くても、行動しなければ何も始まらないから」

「そうね。レイの言う通り。だけど、あなたに力はない。体内での魔力循環が出来ないあなたは身体強化が作用しない。そんな、子供にも負けるような力で、人類最弱の力で何が」

「何も出来ないかもしれない。でも、何もしないわけじゃない。何もしなくて後悔するなら何かをしたい。この理不尽な世界に」

オレがそう言うとフィーナはポカンと口を開けた。そして、急に笑い出す。大声で。腹の底から。

「うん、決めた。私はレイについて行く。レイなら私の見つけたいものが見つかるかもしれないしね」

オレもクリスもポカンとした。だって、今までと話し方が違う上に性格が明るくなったからだ。

まるで、仮面を被っていたかのように。

「よろしくね！ レイ、クリステイナ」

その顔は幸せそうな満面の笑みだった。

第三話 人類最弱男（後書き）

レイ・ラクナールについて

かなり珍しい魔力循環が出来ない病気を持つ。そのため、身体強化などの体内に直接作用する魔法が効かない。つまり、身体強化が使える人（平均で13歳ぐらいから）には絶対に勝てない。核晶欠損症とは違い、魔力は自分で作ることは可能で普通の動きに支障はない。

第四話 新たな仲間

「とりあえず、自己紹介でもしない？ レイとクリステイナは互いを知っていても私は知らないわけだし」

ココロダ山から下りてすぐ近くにあった湖の畔にオレ達はいた。

街はもうすぐなのだけど、オレが疲れたのと傷の手当てをしっかりするためにここで少し休憩することにしたのだ。

クリステイナはあからさまに嫌そうな姿勢を向けた。

「あなた一人で話しておけばいいのではないですか？ 私はレイの傷を見るのに忙しいのです」

「オレは大丈夫だよ。血はもう止まっているし、クリスの治癒魔法がかなり効いているから」

「ダメです。ちょっとした油断から死ぬ時だつてあるのですから」

「クリスなら大丈夫だよ」

オレはそう言うがクリスは治療を止めない。治癒魔法をかけた首筋に貼っていたテープを剥がす。

魔力素材から作られたテープで止血が主な使い道だ。

クリスはテープを剥がして治癒魔法をかけてからまた新しいテープを貼る。

「首は特に危険です。もう少し傷口が深ければレイでは助かりません」

止血魔法は治癒魔法の中でもかなり高位だがクリスなら簡単だろう。一番の問題が、オレには止血魔法が効かないというところ。

治癒魔法は魔力循環とは関係のない傷口付近のみで作用するために効くが止血魔法は体内の血の一部を凝固しやすいようにしてから集めるため、オレには作用しない。

フィーナが小さく溜息をついた。

「最悪の場合、私が止めるから大丈夫だから」

「何が大丈夫ですか？ あながレイを傷つけたんですよ！なのに」

「それくらいわかっている。だから、私を知って欲しい。私の力は特殊だから」

その言葉にオレもクリスも息を呑んだ。何故なら、フィーナの言葉は本気で真剣だったからだ。

「フィーナ・ベルフォルトは言ったと思う。年齢は18歳。武器はこの子、オリジン」

フィーナが微かに刀を抜く。オリジンという名前には聞き覚えがないけど、よく手入れされている刀ということはわかる。

「別名原初の剣」

「聞いたことがありませんね。レイは？」

「オレも」

オレ達がそう言うとフィーナは少し不思議そうな顔になった。そして、首をかしげる。

「おかしいな。私の近くにいた人は全員知っていたんだけどね。まあ、いいか」

そして、フィーナはその刀を地面に突き刺した。すると、突きさした部分から地面が凍っていく。

それはあまりに不思議な光景で、魔法を使わないと不可能である光景だった。

「魔法剣ですよね？」

「まあ、そんなもの。オリジンには炎と氷、そして、簡易召喚魔法が使用可能だから」

「炎と氷。熱量変換と作用変換。かなり凶悪な魔法剣だね。冒険者養成学校の魔法剣のリストにもそこまで強力なものはないはずだけど」

「一番上級の魔法剣ですね。各国の宝剣とされるレベルの。もしかして、炎と氷だと、氷の方が強力ですか？」

「そう。オリジンは別名絶氷の剣。氷属性の頂点に立つ武器だから」

氷属性の頂点ということは古の古文書にあるディバインナイトと同じ存在か同等の威力ということか。それはそれでかなり気になるものだ。

ディバインナイトはディバインナイトという騎士団のトップが使っていたとされる武器で切れ味、耐久度、共に世界最高クラスだと聞いている。

それと同等の剣がフィーナの手の中にあるのか。

「ちょっとした傷から深い傷までこれ一本でどうにかなるよ。ただ、消費魔力が半端ないから出来るだけ応急処置キットを使って欲しいけど」

「そうですね。絶えず能力を発動させようとすればかなりの魔力を必要としますし。レイを傷つけた理由はわかりました。でも、それでもレイを傷つけてもいという理由にはなりませんよ」

「確かめたかったの。オリジンの力が効かない人がどうか」

そう言うとフィーナはオリジンを振った、と思う。腕の動きは全く見えなかったし、オリジンがいつの間にか鞘から抜かれて近くの木に突き刺さっている。どういう軌道を飛んだか全く分からない。

すると、オリジンが突き刺さった木が凍り始める。フィーナはオリジンを抜くが、氷の浸食は木全体を凍らす間で続いた。

「オリジンは傷つけたものを凍らせる能力を持つ。敵味方関係なく。だから、何かの手違いで傷つけた人でも大丈夫な人がいればいいな

と思っていたら、見つかった。レイがそうだった」

確かにオレはオレ自身の体内に作用する魔法やオレ自身を変化させる魔法は全く効かない。養成学校の頃はそれを疎ましくも思ったけど、こういう時に役立つとは。人生って分からないものだな。

「レイとなら一緒にいても傷つけない。ずっと一緒にいることが出来る」

「フィーナさんはもしかして、過去に誰かを傷つけたことがあるのですか？」

それはオレも思っていた。もしかしたら恋人を傷つけていたのかもしれない。だから、オレみたいな人を探していたのかも。

フィーナは予想通りに頷いていた。

「私は過ちを起こした。私のせいで戦に負けた。私がいいたから」

フィーナが自分の腕を握り締める。それは完全な後悔。もう、手に入れることのできない過去を思い出しているに違いない。

すると、クリスは立ちあがった。そして、フィーナに近づいてフィーナを抱きしめる。

「大丈夫です。大丈夫ですから。私達がいいます。これから、三人で旅をしましょう。冒険者のように」

「いいの？」

「私は大丈夫です。レイだってきつと大丈夫です。ダメだと言うなら顔をひっぱたいても頷かせます」

それはそれでオレが大変なことになるかも。

「だから、行きましょう。これからの旅を」

「うん。うん」

フィーナがクリスの腕の中で泣く。多分、嬉し泣きだろう。

自分の力を一番知っている自分だからこそ、誰かを傷つけることが怖かったに違いない。そして、オレを見つけた。その力が通用しないオレを。そして、クリスも受け入れてくれた。

フィーナからすれば、また仲間を手に入れたというものか。失ったはずの仲間というものを。

オレは二人の様子を見ながら穏やかに笑みを浮かべる。

「さてと、街に戻りますか。新たなクエストでも探しながら王都に戻ることでしょう」

これからの方針を勝手に決めるけど、二人は頷いてくれるだろう。

これからの旅が本当に楽しみだ。

第四話 新たな仲間（後書き）

フィーナ・ベルフォルト 18歳

身長169cm 体重??kg

武器：オリジン（刀）

ポジション：フロント

得意魔法属性：炎

第五話 クエストへ

ココロダ山の近くにある町の酒場。そこは前に来た時と違って賑わっていた。まあ、日にちが違ふのと、時間帯が夜だということだろう。

ちなみに、日にちが変わったのは色々としていたから。特に、オレの剣を改めて作りなおしてもらっていたから。まあ、剣の残骸を繋げただけだけ。

まともな剣がなければ買いなおさないとクエストを受けることすらできない。

「ご来店、ありがとうございます」

クリスを連れたオレ達が入ってきた時、周囲に聞こえないようにマスターが言ってきた。周囲に聞こえないようにしたのはクリスがいることである。騒がしくなることを考慮したのだろう。

オレ達はちょうど空いていたカウンター席に座った。

「ここ、結構混むんだね」

「今から稼ぎ時ですし」

オレの言葉にマスターが笑みを浮かべる。それにはオレも同意だ。

「へえ、この世界の酒場は普通なんだ」

フィーナが何に感心しているかわからないが、そもかく、何かに感心しているようで周囲を見渡す。周囲は街の人も多いかもしれないが、冒険者の姿もかなり見受けられる。

冒険者だとわかるのは姿や恰好もだが、荷物の大きさだ。旅人にしては重装備すぎる。冒険者はそれほど準備万端でなければならぬ。ちなみに、オレも準備万端だ。戦闘をすることを除けば。

「それにしても、冒険者が多いですね。何かのクエストでもあるのですか？」

「はい。私も昨日の夜聞いたのですが、大規模な討伐クエストが行われるみたいで」

大規模な討伐クエストということは国が主導かかなりのお金持ちが行うとても大事なクエストだ。人数制限がないなら四角関係なしで参加することが出来る極めて大規模なものでその分、危険性が極めて高い。

今までの街を渡り歩いていた情報から考えて、この地域から推測すると、

「ドラゴン退治？」

「知っていたのですか？」

マスターが意外そうな顔になった。確かに、昨日話した時なんてそのことを一言も話していなかったしね。そう思ったのもついさっきだし。

「ドラゴンが暴れているって噂はクリスも聞いていたよね？」

「はい。街が何個か破壊されたと聞いています。国が動くと聞いていましたか」

「多分、国と冒険者ギルドが共に行うと思う。ドラゴンはそれだけ強大無比な力を持っているし。でも、ドラゴン退治ならオレは足手まといかな」

ひたすら逃げることしかできない。クリスの様な魔術の才能があればいいけど、そんな才能があったらソロで行動してないだろうな。クリスはかなりやる気満々みたいだけど、今回だけは遠慮してもらわないと。そうじゃないと、オレが死ぬ。

「レイ、参加しない？」

すると、フィーナが意外な声を上げた。オレは純粹に驚いてしまう。

「フィーナ、ドラゴンの強さを知って言ってるのか？」

「うん。それで、そのドラゴンっていったい何体くらいいるの？ 15体までならどうにかなるけど。あっ、もしかして、ドラゴンじゃなくて竜の括り？」

「何を言っているかレイは理解できますか？」

無理です。そもそも、ドラゴンと竜は何が違うのかわからないし、真顔でドラゴン15体くらい相手に出来るってそれはそれでおかしいとは思う。でも、フィーナのオリジンは常識離れした性能だから

わからないわけではない。

ちなみに、マスターはポカンとしているし、周囲も静まり返っている。

まあ、ドラゴンを簡単に相手にできると平気で言ったからな。

「嬢ちゃん。冗談はほどほどにした方がいいぞ。そんな細い体でドラゴンに勝つとか夢見てんじゃねえぞ」

その言葉を発したのはいかつい顔というか、歴戦の戦士の傷跡を持つ顔をした大きな男。全身鎧を着ながらもその動きは軽やかだ。ただだけでわかる。冒険者の中でもかなり上のクラスの冒険者だ。

すると、フィーナはその男の言葉を鼻で笑った。

「ごめんね。この世界のドラゴンとは会ったことがないから。でも、一体だけなら私一人で相手にできるよ」

冗談ではなさそうなところがかなり怖い。フィーナの実力なら本当にするだろうから周囲は笑い飛ばしているが、オレとクリスは笑い飛ばせない。

「表に出ろ。そんなに実力があるなら俺らが見てやるよ。その後もな」

また、周囲が笑う。だけど、それは下品な笑み。多分、フィーナに勝ったつもりでいるんだろうな。

オレは小さくため息をついた。

「フィーナ。その刀を使ったらだめだよ」

刀を抜こうとしたフィーナをオレは止める。ここでオリジンを抜けばココロダ山の二の枚だ。だから、抜かせることはさせない。

「強さを証明したいならクエストで見せればいい。余計なところで力を使わないように」

「ガキ。何様のつもりだ？ 俺はお前と話していない」

「連れの言葉なら気にするな。こいつもクエストはやる気満々なんですね。オレ達だってクエストは受けるさ。ドラゴン退治のクエストは参加した方がいいからな」

「止めた方がいいぜ。今回は少数精鋭。実力のあるメンバーでしか構成されない。お前らみたいなガキの集団じゃ不可能だ」

つまり、まだクエスト参加の受け付けは始まっていないのか。だったら、いくらでも可能だな。

クリスマスもフィーナも実力だけなら申し分はない。一番の問題はオレになるけど、そこはそこでどうにかするしかないだろう。最悪、無償での参加を具申するしかない。

「ガキ。表に出ろ。女は許してもお前だけは許せん。何様のつもりだ？ この俺に指図しようだなんて」

ちらりとクリスマスとフィーナを見る。二人はゆっくり頷いてくれた。もしもの時は任せた。

「同じ冒険者だけど？」

「ふざけるな！」

男が動く。だけど、それより早くフィーナの刀が首筋に当てられ、クリスの杖が抜き放たれた剣を絡め取っていた。

うん、男のオレは何も行動してないってすごく最低だよな。

「これ以上動けばあなたの首が飛ぶよ」

「動きは封じさせてもらっています」

あまりに息が合いすぎている気もするけど、この二人なら納得かな。

オレは小さくため息をついてマスターにかかるく謝った。

「すみません。今日はこれで出ます」

「またの来店をお待ちしております」

オレが立ち上がるとフィーナは刀を引き、クリスは杖を戻した。男はまだ呆然としている。

まあ、二人の動きが襲う以上に良かったから上手く行ったけど、もし、ほんの少しでも遅れていたならオレの首は飛んでいたかも。そう考えると少し怖くなってくる。

「レイ、これからどこに行くの？」

オレの後を追って酒場から出たフィーナがオレに尋ねてくる。オレは頷いて応えようとしたところ、クリスが話に入ってきた。

「国が経営するクエストを受諾する場所ですよ。今回は少数精鋭だと聞いているので色々選定があると思いますけど」

「二人なら大丈夫だな。二人なら」

オレは確実に無理だけど。

第五話 クエストへ（後書き）

クリスティナ・アピニオンについて

アピニオン王家第三王女で王位継承権第12位であるれつきとした王女。ただし、自由奔放なところがあり、国王もそれを認めているため、レイと二人で行動も出来る。魔術の才能は一級クラス。自分を守りつつレイも守れるくらいに強い。

第六話 内容（前書き）

とりあえず、この話で第一章の主要味方キャラは出揃います。

第六話 内容

「うわっ」

オレは思わず口に出していた。そこに書かれていた内容を見たからだ。はつきり言って、かなりマズイクエストだと思う。クエスト内容はドラゴン退治なのだが、その注釈に書かれている文字が、

『王国騎士団壊滅。リットン冒険団全滅』

王国騎士団と言えばかなり大規模な騎士団だ。ただ、戦力から見てもそれほど比重は高くないが、問題はリットン冒険団の方。そこはかなり有名な冒険者ギルドの一つで、最強と言われる冒険者が何人が在籍しているはずだった。

それすらも壊滅か全滅。ドラゴンの力が桁違いということだけわかる。

それを見るクリスの顔は険しい。

クリスにとって王国騎士団は馴染みが深いはずだ。もしかしたら、王国騎士団の実力も知っているのかもしれない。

「王国騎士団ってどのレベル？」

「熟練度や武器から考えてリットン冒険団と同等かそれ以上です。騎士団の団長がフラブルですから」

ああ、あの『烈火の騎士』か。騎士団の中で最強と言われる炎を操

る魔法剣士。未だに無敗というわけのわからない記録を作り出しているとか。かなり凄い人が率いていたのか。

オレはそのクエスト表に手を伸ばした。すると、同じように手を伸ばした人がおり、お互いに遠慮するように手を止める。

「ごめんな」

オレの言葉が途中で止まった。同じタイミングで向こうの言葉も止まる。そこにいたのは見知った顔。神は長くポニーテールに括っており、少し目は厳しさがあるが、凛々しさもあると言える顔で服装が冒険者御用達のジャケットとズボンの上から軽装甲の鎧を身につけている。

「フィラ？」

「あんだ、レイ！ どうしてここにいるのよ！」

「フィラこそ。王都を中心に活動するって聞いていたけど」

フィラ・ファンプル。それが彼女の名前だ。簡単に言うなら同級生という間柄だろう。

ただし、僕が劣等生に対し、フィラは優等生。接点はほとんどないはずなのに何故かよくいたというわけのわからない関係をしている。

「フィラさん、どうかしたの？ あれ？ レイ？」

フィラの後ろから顔をのぞかせたのは身長が140cmもない子供の様な高さ。顔も童顔であり、髪の毛も長くもなく短くもない。た

だ、全身鎧を着ているところがミスマツチだった。

「リークもいたのか。まあ、お前らコンビだもんな」

「コンビじゃなくて双子だから」

フィラが少しむくれながら言う。ちなみに、フィラは158cmと普通なのだが、リークと一緒にしなければ年の離れた姉弟にしか見えない。ちゃんとオレと同じ年なのに。

クリスが誰ですかと視線で尋ねてくる。オレは視線で少し待ってと返した。

「フィラ達もこのクエストを受けるのか？」

「ええ。ドラゴン退治は危険だけど、ここでこれに参加しておけば有名になれそうだし」

「問題が僕達じゃ死にそうなんだけどね」

確かにそうだろう。かなり有名な二つの団体が壊滅か全滅というありえない事態に直面している。ここで死にそうじゃないという奴がいるならオレは本気で驚くな。

「そういうもの？」

フィーナが不思議そうに言う。そう言えばいた。一人だけ。

「レイには無理よ」

「オレにはな。こいつらが参加したいみたいだから参加するだけだ。登録するなら一緒にしようぜ」

オレはそう言っただけでクエスト表を手を取った。だが、手に取った瞬間に別に人にかすめ取られる。

クエスト表は本来取った人が優先だ。これは完全なマナー違反。

オレはかすめ取った奴の顔を睨みつけた。

「最弱の男が行くクエストじゃねえよ」

「お前か。ガイウス」

そこにいたのはこれまた懐かしい奴だった。優男の顔をしており、身につけている鎧から件まで全てがピカピカ。完全に金持ちのボンボンだ。そして、貴族でもある。

「ガイウス様だ。特に貴様のような弱者に呼び捨てられるのは嫌いでな。お前の命を助けてやるんだ。感謝」

「レイ、これをどうすればいいの？」

ガイウスの手にあったはずのクエスト表はいつの間にかフィーナの手の中に入った。オレもガイウスもこのことに関しては本気で驚いている。

ガイウスなんて口を開いた間抜け面のまま何も言えないでいる。

「ちょっと待って。その表を持ったまま受付に行く。フィラ、リー

クも行くよ」

「え、ええ」

フィラも一部始終を見ていたから信じられないという風だった。実際にオレも信じられない。でも、フィーナの実力から考えればこれぐらい朝飯前の様な気もする。

フィーナが受付にクエスト票を出した。受付がをそれを見てフィーナの顔を見る。

「クエスト参加の方はあなた一人ですか？」

「オレ達もいる。とりあえず、代表者としてオレの名前を書くか」
受付から渡された紙に自分の名前を一番上の欄に書く。一応、団体で来た時の記入表だ。バラバラにされるよりチームがひとまとめになった方が強いことがあるためこういう風に書かされる。

オレは名前を書き終わるとそれをフィラに渡した。フィラがすぐに書いてリークに渡し、続いてフィーナ。最後にクリスに渡った。

「書きました」

クリスが受付に記入評を提出する。それを見た受付の動きが固まり、そして、クリスの顔を見た。多分、軽装甲の鎧にあるエンブレムを確認しているのだろう。

フィラがオレを肘で小突いてくる。

「ねえ、なんで女連れ？」

「変な風に言うな。クリスとはクエストで出会って、フィーナはちよつと前に出会っただけだ」

「ふーん。まあ、いいわ。私とリークは先に出ているわ。早く来なさいよ」

ここは妥当な判断だろう。たくさんの方がいればそれだけ見動きはしにくいし、はぐれる可能性だってある。受付の方もほとんど終わっているらしく、クエスト受諾表を作っていた。でも、選定があるんじゃないのか？

「選定はないのですか？ そう聞いていますが」

クリスも同じように思ったらしい。確かにクエスト表の方にも選定があると書かれてある。

「参加者が少ないので選定はなくなりました。今、このクエストを受けているのは皆様方をいれて八人です」

かなり少ない。いや、めっちゃくちゃ少ない。冒険者の中では勇名をかせようとする人たちが多い。そのために冒険者になる人だっている。

ドラゴン退治だなんて勇名を作るにはもってこいの仕事なのに。やはり、騎士団と冒険団の壊滅と全滅が影響しているのか。

「ありがとうございます。レイ、フィーナ、出ましょう」

「そつだな」

「ちよつと待て」

ガイウスの声にオレはクリスとフィーナの背中を押して外に向かわせる。この状況でガイウスに用があるのはオレだけだろう。

「貴様、貴族に対して何をしたかわかっているのか？」

「貴族様を殺させないようにしたただけだけど？」

オレは皮肉で返す。先ほど言われた言葉を反対にただけだ。ただし、優等生が劣等生に言われでもしたらどうなるかは知らない。

「貴様、この場で殺して」

ガイウスが剣を抜いた瞬間、そのピカピカの剣が柄を残して落ちた。いつの間にかオレとガイウスの間にはフィーナの姿がある。フィーナは刀の柄から手を離れた。

「レイ、行くよ」

そして、オレの手を引っ張って外に連れて行く。多分、ガイウスが剣を抜くのがわかってフィーナが入ってきたのだろう。正直に言っておりがたかった。ガイウスには確実に勝てないし。

フィーナのオレを握る手は微かに震えている。それをオレは気づかないふりをして外に出た。外にいるのはポカンと口を開けてアホ面をしたフィラとリーク。

オレはフィラの鼻をつまんでやった。

「何するのよ!」

「顔が面白かったからつい」

「ついじゃないわよ、ついじゃ! とりあえず、宿にしましょ。少し疲れたわ」

それに関しては賛成だ。

第六話 内容(後書き)

フィラ・ファンブル 17歳

身長158cm 体重??kg

武器：ナイフとメイス

ポジション：フロント

得意魔法属性：風

第七話 自己紹介（前書き）

最近少し不調気味です。

第七話 自己紹介

少し大きめの少し値段が高めの宿屋。その大部屋にオレ達はいた。七人部屋らしく、ベッドは全部で七つ。かつ、かなり広々としている離れなのでクリスがいる今はありがたい。

このことをフィラに話したら、フィラは今でも呆然とクリスを見ている。まあ、王女が冒険者の真似事をしていとは思っていないだろう。

そのクリスは部屋に入った瞬間に荷物を置いてベッドにダイブしていた。それをちょうど入ってきたフィーナがクスクス笑う。

「クリステイナ、はしゃぎすぎ」

「久しぶりのベッドです。それに、ふかふかしすぎないこの感触は最高ですから」

フィラがオレのわき腹を肘でつついてくる。

「王女がいるのにこんな部屋でいいの？」

まあ、普通はそうだろうな。

「仕方ないだろ。手持ちの金を考えてこれが精一杯だ。王都に戻るまで後200エルトしかないし」

「十分じゃない」

まあ、200エルトもあれば王都までの道のりはかなり豪華にいける。馬車を使ってもお釣りがくる。でも、世の中は理不尽だ。何が起きるかわからない。

特に、オレは弱いから。

「病気になったり怪我をしたらどうするんだ？ 世の中は理不尽だ。オレ達が思っているほど甘くない。だから」

「だからお金が必要？」

フィラの言葉にオレは言葉を止めた。凶星だったからだ。あの時、もっと早くお金を集めていればと思えて仕方がない。

オレは目を伏せる。それにフィラは小さく溜息をついた。

「あんなね、世界が全て理不尽だと思わないでよ。私だってお金があるんだからクエストの間ぐらいは出してあげるわよ」

「フィラさん、そこは僕にも同意を取ってよ」

「いいじゃない。あんたは私の奴隷なんだから」

フィラはそう言うが、実際にフィラとリークの関係はそうだった。双子であり主人と奴隷。簡単に言うなら、オレが出来なかったことをフィラは成し遂げた。

オレはそれが羨ましい。

「まあ、いいわ。まさか、あんたとこんなところで再開するとは思

わなかったし、とりあえず、自己紹介しない？ 私は王女様ともう一人は初めて会うから」

「そうですね。私はクリステイナ・アピニオン。アピニオン王家第三王女です。今は冒険者ですので気軽にクリステイナとでも読んでください」

「質問ー！」

フィラが手を挙げた多分、質問したい内容はあれだろうな。

「どうしてレイはクリスって呼ぶの？ クリスは男の人の名前はすよ」

「なんとなく」

オレは即答でこたえた。最初、クリスがオレに命じたことが、

「自分を王女だと思わないでください。できれば、あなたと同じ冒険者として見て欲しいです」

だったので、オレはクリステイナのことをクリスと呼ぶようにしたのだ。そう呼べば顔を見ない限りクリステイナ・アピニオンともわかない。

それがいつの間にか定着しただけのこと。

「なんとなくって、相変わらずみたいね」

「どうして相変わらずなんですか？」

「冒険者養成学校の頃と変わらないのよ。あつ、私はフィラ・ファンブル。こつちがリーク・ファンブル。レイとは同期の生徒だったの。ついでにクラスメート」

「つまり、レイが弱いのを知っているのですね」

その言葉にフィラとリークの二人は頷いた。僕の弱さは養成学校時代からかなり有名だったしね。とくに、戦闘訓練じゃ真つ先にやられるか隅に隠れているかのどちらか。完全に使えないし。

それでも戦闘が出来ないから他の技能を頑張つて鍛えてたんだけどね。

「まあ、レイは戦闘には弱くても知識に関してはすごかったから。レイって基本図書室に籠もっていたのよ。そこで色々な植物についての知識とか動物についての知識を勉強したみたいで実地試験じゃ右に出る者はいなかったわ」

フィラのその言葉にクリスとフィーナの二人は信じられないような目でオレを見てきていた。その意味はわかるけどそれはかなり失礼じゃないですかね？

オレは小さくため息をつく。

「戦闘はできなくても、それ以外が出来なければ冒険者としてやっていけない。知識と行動力があれば冒険者としていけるからね」

「そうそう。レイはロツククライミングが本当に得意なんだから。確か、実地訓練で魔法を使わずに山登りをさせられた時、ロツクク

ライミングで最速記録を樹立していたわよね」

懐かしい話だ。魔法禁止だから生徒からブーイングの嵐だったけど、オレは得意なロッククライミングで一直線に山頂を目指し、ベストタイムを20分ほど更新したんだ。最初に上がってきたガイウスの顔と言えは今でも笑える。

他にも実地試験じゃいろいろ記録を樹立していたな。

「レイってすごいんだ。あつ、私はフィーナ。フィーナ・ベルフォルト。少し前からレイとクリステイナと旅をしているの。冒険者ってほどじゃないけど、刀の扱いは得意かな」

「それよそれ」

フィラがフィーナに詰め寄る。

「ガイウスに使った高速移動術。あれ、どうやってやったの？ ガイウスも私たちも気づかない動きだったし」

「えっ？ 普通に走っただけだけど？ レイが危なかったから」

その言葉にフィラが固まった。リークも固まっている。

多分、フィーナはそれが普通なのだろうが、オレ達からすればかなり特殊だとしか言いようがない。目にも止まらぬ速さなんて普通じゃ考えられないから。

フィーナは一人で次元の違う高みにいる。

「フィーナって、ドラゴンを見たことがあるって言っていたけど、ドラゴンはどんな感じ?」

オレ達の中だと、ドラゴンは見て生き残ることがかなり難しいとされている。本当に大規模な討伐隊か少数精鋭の部隊で戦うが、半分生き残ればいい方だ。

だから、オレ達は誰もドラゴンと戦ったことがない。

「えっと、ドラゴンか竜のどっち?」

「二種類?」

フィーナは頷いた。

「ドラゴンは進化の過程で生まれたもの。言うなら、あらゆる生物の頂点に立つ存在。竜は神によって生み出されたもの。竜に関しては」

フィーナがオリジンを手に取る。鞘から刀身を走らせ、虚空を薙いだ。

「神剣が無ければ話にならない。何千万も人が攻撃しない限りには」

「あなた、何者?」

フィラがフィーナを睨みつける。その全身から警戒の色が出ていた。理由としてはあまりにもフィーナは知りすぎている。ドラゴンと竜

なんて二つがあるなんて知らないからだ。

冒険者養成学校では生物、特に危険な生物について習うが、竜なんて聞いたことがないのに。

「神剣を持ち、常人離れをした能力。そんな存在聞いたことが」

「フィラ、今はいいよ」

オレはフィラを止めた。そして、フィーナを見る。

「確かに、フィーナについて疑問があるかもしれない。でも、フィーナが話したくないなら無理に聞かなくていい。今はクエストについて考えよう」

「はあ、そうね。フィーナ、ごめん」

「そんな。隠しているのは私なのに」

「誰だつて隠したいことがあるのに聞いたからよ。話したくなったら話さない。聞くくらいはしてやるわ」

その言葉にオレは吹き出していた。リークも同じように吹き出す。それに応じてクリスやフィーナも笑い出した。

フィラがただ一人だけ顔を真っ赤にしている。

「ともかく、今はクエストについて話しましょ！」

そんなフィラをオレ達は暖かく見守るのだった。

第七話 自己紹介（後書き）

ドラゴン退治のクエストはもう少し話が入ります。

第八話 独り言（前書き）

書いていたらいつの間にか重要な話に

第八話 独り言

柄に収めていた片手剣を引き抜く。そして、それを振り上げ、振り下ろした。

簡単に言うなら素振りだ。

例え身体強化魔法が使えなくても素振りは毎日欠かしたことがない。

もし欠かしたなら、本当に足手まといになってしまう。

普通の振り上げ、振り下ろしをした後には横に振ったり斜めに振ったりする。

簡単に言うなら連撃だ。

71

連続攻撃の略であり、剣を上手く動かさないとなかなか出来ない。

それをしつかりやる。身体強化魔法の前では何の効果も発揮しないが、何があるかわからないから。

それに、自分が積み重ねた努力は自分を決して裏切らない。

「こんなものかな」

オレは剣を鞘に収めた。準備運動は終了だ。次は全力で振る。

「素振り？」

オレは振り返った。そこにはオリジンを腰にさげたフィーナの姿。服装はドレスだ。

オレは思わず固まってしまふ。フィーナは自分のドレスの裾を掴んだ。

「やっぱり気になる？ 使える戦闘服がこれしかなかったから。ただ、防御力は高いと思う。やってみる？」

「やらないから。こんなに朝早くどうしたんだ？ クエスト開始は今日の午後からはずだけど？」

「みんなに言いたいことがあったから。後はレイだけ」

フィーナの顔が真剣になる。オレも背筋を正した。

「もし、竜だと私が判断した場合、レイも逃げて。竜には私しか対応出来ない」

「絶対に？」

「うん。絶対に」

面と言われるとへこんでしまふ。フィーナのような女の子だけに任せるなんて嫌だけど、足手まといになるなら我慢するしかない。

本当は一緒に戦いたいけど。

「わかった。でも、約束して。絶対に戻ってくるって。フィーナは竜程度にはやられないよな？」

「うん、竜ならやられない。竜程度なら」

フィーナだって人の子だ。もしかしたら、フィーナが勝てない存在があるかもしれない。その時はオレ達も戦うだけだ。

フィーナがオリジンを鞘から抜く。あくまでゆっくりと。だが、鞘から抜かれるまでの時間は一瞬のように思えた。

光が反射している。まるで、磨かれた鏡のように。

「これからは私の独り言だと聞いてね」

フィーナが静かに腕を動かし始める。オリジンが光を反射させながら煌びやかに動く。

それはまるで舞踏。恐ろしいまでに美しい舞踏だった。

「私は昔、大切な人を失った」

腕だけではなく足も動かしていく。時に激しく、時に静かに。

「それは、私じゃ、私達じゃどうにもならないくらいの運命に対抗しようとして。そして、私は生き残った」

もしかして、フィーナが今一人なのは、

「オリジンを片手に私は思った。どうして私なんか生き残ったのかって」

次第に腕の振りが早くなっていく。

「だから、私は全てを拒絶しようとした。近づく全てを止めながら」
オリジンの先が止まる。周囲にはいつの間にか粉雪が舞っていた。
オリジンで空気を斬ったことによる粉雪。

それは怖いくらいまでに幻想的な光景。

「そして、レイヤクリステイナと出会った。私を受け入れてくれる人を見つけた。私はまだ、一人じゃないと思えた」

オリジンを鞘に収めながらフィーナがオレを見てくる。

「だから、私はもう失いたくない。大切な仲間を」

「そっか、なら、オレの独り言を聞いてくれ」

オレの言葉にフィーナが頷く。それを確認してオレは語り出した。

「オレは冒険者を目指していた。どんな困難にも立ち向かい、新天地を開拓しようとする冒険者の姿は羨ましかった」

だから、オレは冒険者を目指した。

「冒険者を目指したのはオレと幼なじみ、何の因果がわからないけど、フィーナって名前なんだ」

フィーナ、フィラ、フィナとよく似た名前が多いけど、それは事実なのだから仕方ない。

「フィナの家は貧乏だった。本当に貧乏だった。そして、オレが冒険者養成学校の入学が決まった日、フィナは売りに出された。人身売買だ」

人身売買なんてものは表では行われていない。全ては裏の取引。

「すぐにお金を作ってフィナを取り返した時、フィナの心は壊れていた」

フィーナが息を呑んだのがわかった。オレは拳を握り締める。

「フィナの最後の言葉が『殺して』だったんだ。だから、オレはこの手でフィナを殺した」

あの日、フィナを殺した日、そんなオレを発見したのが他の幼なじみだった。そいつの話ではオレは三日三晩ほど何の反応もしなかったらしい。

目は開いているし普通に食事もした。だが、返事はしない。実際に三日三晩の記憶はない。

「それからかな。冒険者として力を入れたのは。必死に勉強して、必死に覚えて、戦闘以外はあらゆることを普通にこなせるようになった。まあ、戦闘が出来なければ冒険者失格なんだけどね」

オレは一旦言葉を切り、そして、続ける。

「だから、オレは失いたくない。クリスだって、フィラだってリークだって、そして、フィーナだって誰も、もう、誰も」

「レイ」

「だからさ、無理だと感じたら逃げてくれよ。誰かが死ぬところなんて、もう、見たくないから」

フィーナがゆっくり頷いた。オレの過去を言うのは久しぶりだ。フィラに言った時以来か。クリスにもまだ言っていない。クリスに言ったなら確実に人身売買について調べようとするから。

するとフィーナが小さく息を吐いた。

「ところで、いつまで隠れているの？」

「えっ？」

「はうっ」

その声にオレが振り向くと、そこには扉を開けて出てくるクリスの姿があつた。今の話を聞かれた？

「盗み聞きとは大層な御趣味だね」

「そ、そう言うわけじゃないのですよ。レイがいつものように朝練をしているだろうなと思って来たからお二人が話していたので」

クリスの目が真剣になりオレを見てくる。

「レイ、人身売買をしていたのはどの貴族ですか？」

「ダメだ。クリスが踏み言っていけない領域だから。下手に深く入れば、例えクリスでも殺される」

「もしかして、ロバン伯爵？」

その問いにオレは頷きだけで返した。ロバン伯爵はその筋ではかなり有名だ。簡単に言うなら、違法手段によって富を築きあげている。そして、その真実を知ったものは闇の中に葬られていく。

それは王族であつても同じだつた。

「オレは仲間を失いたくない。だから、クリスは動かないでくれ。ロバン伯爵との決着は」

鞘から引き抜いた剣をオレは勢いよく地面に突き刺した。

「オレがつける」

第八話 独り言（後書き）

リーク・ファンブル 17歳

139cm 体重40kg

武器：片手剣と盾

ポジション：フロント

得意魔法属性：大地

第九話 罫

装備を確認する。食料よし、工具よし、ロープよし、アイテムよし。後は、剣も身につけているから十分だ。

オレは小さく息を吐いて周囲を見渡した。周囲には、心配した顔のクリスに話しかけるフィーナ。その二人を見ているフィラ。リークはオレの隣にいる。

他の参加者は歴戦の冒険者らしき人達とガイウスだ。

「レイ君は緊張している？」

リークが尋ねてくる。リークは誰が見ても震えているくらいに緊張していた。

今、オレ達がいるのはクエスト受諾表に書かれていた集合場所이었다。町の外にある広場。

ここからクエストが始まる。

「緊張していると言えばしている。まあ、人類最弱男に出来ることなんて限られているけど」

「確かにレイ君は最弱かもしれないよ。でも、僕もフィラさんも、おそらくガイウスもレイ君が一番勇者の資格を持っていると思うているはずだよ」

「何で？」

そんなことはしたことがない。というか、記憶にない。

「フィラさんと一緒に崖から落ちた時、レイ君は片腕が折れていたのにフィラさんを背負って崖を登りきった」

そう言えばそんなことがあった。あの時は足を踏み外したフィラを助けるために手を伸ばし、結局は一緒に落ちたのだ。

右腕は折れて左腕だけだったけど、両足に怪我をしたフィラを背負ってオレは崖を登りきった。

あの時はガイウスに「バカかお前」と言われたっけ。

「他にも、魔物と遭遇した時にレイ君は戦っていた。たくさん逃げる人がいた中でレイ君はただ一人剣を抜いて立ち向かった」

まあ、結局は魔物の攻撃で怪我をしたけど。

リークが笑みを浮かべる。

「レイ君は身体強化魔法が使えなくても立派な強さを持っている。それは僕達もわかってるよ」

「そついうものかな？」

いまいち自分にはわからない。戦闘は全く出来ないけど、救える人を救えないのは嫌だったからオレは今までやってきた。

フィラの時だって魔物の時だって、それを元にやってきた。

「強さは人それぞれだと僕は思うよ。フィラさんだって思ってる。レイ君は戦いは出来なくても諦めないことを知る人だって」

「買いかぶりすぎだ。おつ、揃ったみたいだな」

オレの言葉にリークが振り向くとそこにはフード付きのマントを深くかぶった人がいた。背丈は小さい。まるで子供だ。その手に握られているのが赤いクエスト受諾表。

クエストを依頼した人物が持つものだ。

これから、クエストが始まる。

「準備はいい？」

フードを身につけた人物、声は女の子、の音が響いた。誰もが緊張した面持ちで頷いている。緊張していないのはフィーナだけか。

でも、少し心配だ。

「今からドラゴンの目撃例が多かった場所に向かう。三日以内に見つからなかったらクエストは破棄するから」

その言葉にオレ達は頷く。

ドラゴンも生物だ。常にそこにいるとは限らない。移動されていたなら見つけるのが時に困難になる時がある。

そういう場合は仕方ない。

「ついて来て」

フードの女の子が歩き出す。それを追いかけるようにオレ達も歩き出した。オレの位置は一番後ろだけど。左にはフィーナがいる。

隣に並んでわかったが、フィーナは緊張している。その緊張を周囲に出さないようにしているだけだった。

「フィーナ、大丈夫？」

「レイ。うん、何か嫌な予感がしただけだから。でも、大丈夫。私だけじゃない。クリステイナやフィラ、リークがいる。今の私は一人じゃない」

「オレもカウントして欲しかったな」

「欲しかったら強くなること」

オレはフィーナの言葉に苦笑した瞬間、オレの右手を誰かが掴んだ。右を向くと、そこには少し膨れたクリスの姿があった。

「私だって緊張しています」

「うん、そうだね」

それは見たらわかる。この中で一番緊張しているのはどう見てもクリスだ。冒険者の中でもクリスはかなり異質ななり方をしている。

本来、冒険者は冒険者養成学校に入る。でも、クリスは冒険者養成

学校に通わず国からの伝手で冒険者になった。まあ、フィーナもクリスの権限で冒険者扱いしているけど。

冒険者養成学校では戦闘訓練もする。大規模なものだ。それを体験したからこそ緊張はまだ少ない。クリスの場合は戦闘経験が少ないから緊張している。

「大丈夫。オレは頼りにならないけどフィーナやフィラがいる。落ち着いて」

「はい」

それでもクリスは緊張したままだ。すると、フィーナが立ち止まった。それに気づいたオレやクリスも立ち止まる。

「待ちなさい」

そして、フィーナの言葉が響き渡った。誰もが足を止める。そして、全員がフィーナに視線を合わせた。

その時、オレは気づいた。周囲の異変を。

オレ達が歩いているのは森の中だ。でも、何故か周囲に気配がない。動物の気配も。

どうやらそれはフィラやガイウスもわかっていたらしくフィーナに注意を向けているのではなく、周囲に注意を向けていた。

フードの女の子がフィーナに近づく。

「早くしないと遅れる」

「ええ、わかっているわ。その前に」

フィーナの目が微かに細まった。

「周囲を囲んでいる人達は何？」

その言葉にクリスやリーク、他の冒険者達が慌てて周囲を見渡す。どうやら気づいていたのはフィラとガイウスだけらしい。

フードの女の子は微かに身を揺らした。

「そんなわけが」

「なら聞くが」

ガイウスがフードの女の子の言葉を遮る。

「何故、貴様から猫の匂いがする」

その瞬間、フードの女の子が後ろに下がった。それと同時にフードが脱げて顔が見えてくる。その頭にあつたのは猫耳。

冒険者達が一齐に剣を抜くのと周囲から同じような猫耳をして武装した人達が現れるのは同時だった。

「獣人族か」

オレは剣を抜きながら呟く。まさか、ドラゴン退治のはずが魔物退

治になるなんて。

「ここで殺す。あなた達に恨みはないけど、竜神様を怒らせる真似はさせない」

オレ達をここまで案内していた獣人族の女の子が腰からナイフを抜いた。本当なら完全に油断したところで殺すつもりだったのだろう。でも、フィーナに見破られた。

竜神様という言葉には気になるが、今は生き残ることを、

ズシン。

地面が揺れた。誰もが動きを止め、武器を下ろしながら周囲を見渡す。

地震じゃない。地震の揺れはここまで一時的じゃない。でも、揺れた。

ズシン。

まただ。また、音と共に地面が揺れた。

「そんな」

周囲を見渡せば獣人族が顔を真っ青にして武器を落としていた。まるで、何かに恐怖するように。

「嘘、だよな」

その言葉はフィーナの言葉。まるで、信じられないものを見つけたように。

オレは周囲を見渡す。もう、音はしない。揺れもしないでも、誰かがやって来るのがわかった。

強烈な気配。立っているのがやっとで座れば立ち上がれなくなるで
ある殺気。

唾をぐくりと飲み込む。その場にいる誰もが動けないまま、森の中から一人の少年が現れた。

目は長い前髪で隠れているからわからないが、その顔に浮かんでいるのは笑み。

「何をしているのかな？」

その言葉に反応したのは獣人族だった。特に、一番近くにいたフィーナの女の子が腰を抜かしたのかその場に座り込んでいる。

嫌な予感がする。

「邪魔をしないで欲しいな。彼らは僕の餌なのに。しかも、女の子が三人も」

舌が、人にしては異様に長い舌が少年の口から飛び出していた。

「エンシェント、ドラゴン」

フィーナが小さく呟いた。その目に映っているのは驚愕の表情。

「さあ、誰が楽しませてくれるのかな？」

第九話 罨（後書き）

ドラゴンはドラゴンでもエンシェントドラゴンとの戦いです。その
戦闘能力とは・・・

第十話 エンシェントドラゴン（前書き）

プロローグにあった、三人の少年とその仲間達、ですが、三人の少年が揃うのはまだまだ時間がかかります。後、十話は出さない予定です。

第十話 エンシエントドラゴン

周囲一帯に張り巡らされた強力な殺気にオレ達は動けないままだった。フィーナは手に持つ刀を大きく揺らしている。いや、手自体が震えている。

このままじゃ全滅する。

「竜神様」

エンシエントドラゴンの少年の一番近くにいた女の子の獣人族が小さくつぶやいた。その言葉に少年の目が細まる。

「その名前で呼ばないでほしいな。僕達は君達のような下等な生物とは根本的から違う存在なんだよ。次に呼べば君達一族は根絶やしにしよう。うん、それがいいや」

その言葉は圧倒的なまでの力の差があるからこそその言葉。オレは剣を握り締めた。どうすればいい。どうすればこの場から脱出できる。考える。今自分に出来ることを。

下手に動けばやられる。でも、動かなくてもやられる。頼みの綱はフィーナ達だけど、誰も動けない。どうすれば動かすことが、

「へえ、君は僕に抗うつもりなんだ」

目の前に少年がいた。背筋に寒気が走る。体が完全に硬直して動かない。蛇に睨まれた蛙だ。

背筋に汗が流れる。呼吸が少し洗い。心が冷静でいられない。

「すごいね。ただの人間なのに、僕に抗おうなんて」

少年の手がオレの腹に触れる。このまま黙って殺されるわけには、

「まだ抗うつもりなんだ」

その瞬間、少年の人差し指がオレの腹を微かに突き刺さった。痛みが出るが、我慢できない痛みじゃない。

「勇気ある下等生物に僕は敬意を表してあげよう。この中で一番苦しめてあげる。僕の毒で」

そして、何かが入り込んできた。オレはその場に膝をつく。だけど、痛みは一向に襲いかかってこない。

あれ？ どういうことだ？

「頑張るね。この毒は入った瞬間に痛みでのたうち回るはずなんだけど、君はどうやら根性があるらしい。そういう生物は嫌いじゃないよ。さあ、君は痛みの中でのたうち回りながら仲間が殺される光景を見ていればいい」

オレはその場に倒れた。そっか、今言った毒は魔法なんだ。僕にそのタイプの魔法が効かないことをこいつは知らない。とりあえず、今は演技でもしないと。

「さて、次は誰を殺すでしょうか。神に刃向った下等生物に裁きを下してやるっ」

「神に刃向った？ 冗談はやめてください」

クリスが杖を構える。それに応じてみんながそれぞれ武器を構えた。

「神はこの世に存在しません。存在するとするなら、それはそれぞれの心の中にしかないのです。あなたに神を語る資格はない。神は万物の真理にして平等の存在。あなたは神じゃない」

「人間が神を語ろうと言うのかい？ 君は詩人だね。神は君が思っているほど万能じゃない。そして、平等でもない。君の中でも違いがあるだろ？ それなのに平等だとしても」

「違いがあるからこそ、平等があるのです。違いがなければ平等は存在しません」

「違いが平等？ ふははっ、餌の分際で何を」

その瞬間、フィーナが地面を蹴った。姿勢を低くしオリジンを一閃する。完全に隙をついた攻撃。だが、その剣先は少年にかすることはなかった。少年の姿はフィーナの横にいる。

「僕に刃向うとは、愚かな」

少年の手が動いた。フィーナが慌ててオリジンで受け止めようとするが、フィーナの体はまるで木の葉の様に吹き飛び僕の近くの木に激突した。オリジンが僕の目の前に突き刺さる。

威力が違う。あのフィーナを一瞬で。

「さあ、次は」

少年の頬をナイフがかすった。かすった部分からは赤い筋が出来上がり、少年の頬に血が流れる。

ほんの些細な傷。それを与えたのはフィラだった。

「刃向うことが愚か？ ふざけないで。立ち向かうことを恐れる冒険者は少ないわ。私も、あんたがいくら強くても、私は戦う。クリステイナは逃げなさい。時間は稼げないかもしれないけど」

フィラがナイフの先を少年に向けた。リークも盾を構える。

それに応じるように他の冒険者も武器の先を少年に向けた。もちろん、ガイウスも。

「貴様ら。下等生物の分際で！」

少年の体が変わる。人の体をしていたはずがだんだん大きくなっていった。体は黒く、そして、ドラゴンとして述べられている形に。

ただ、違つ点を挙げるとするなら、その額には一本の角が生えている。

『殺す。殺す。殺す！』

「レイは倒れたままでお願い」

エンシエントドラゴンとなった少年を見たいオレの耳の中にフィーナの声が聞こえてきた。多分、エンシエントドラゴンの思考の中

からはオレのことは完全に除外されているはずだが、まだまだしていた方がいいみたいだ。

オリジンが引き抜かれる。そして、フィーナが不適に笑ったような気がした。

「珍しいエンシエントドラゴンだと思っていたら、あなた、一本角だったの？」

その言葉にエンシエントドラゴンの動きが止まった。そして、その視線がフィーナの方を向く。

「なんだ。まだ生きているエンシエントドラゴンだから三本角以上だと思っていたら、一番弱い一本角だったとは。興奮めね」

『貴様、何様のつもりだ。この我に勝とうとでも言うのか！』

言葉遣いが変わっている。でも、エンシエントドラゴンの口から吐かれたのはまごうことなき炎の塊。それに向かってフィーナはオリジンを構えた。

「炎は、私の得意分野だよ」

その小さな言葉と共にフィーナは冷気と氷を作り出した。その冷気と氷にエンシエントドラゴンの炎が直撃し水蒸気を作り出す。

だが、エンシエントドラゴンが放った炎は作り出された氷に阻まれて霧散していた。エンシエントドラゴンは目を見開いてフィーナを見ている。

炎の威力はけた違いに高い。それは、周囲に飛び散った炎でわかる。だって、木々を燃やすどころか一瞬にして溶かしたのだから。理論上おかしいような気もするが、これがドラゴンの炎なのだろう。

多分、フィラ達に向かって放たれていたら確実に全滅していた。

『貴様！ 『絶氷の魔女』か！』

「行くわよ！」

フィーナのその言葉と共にクリスが杖を振った。炎の槍がエンシェントドラゴンに向かって放たれて翼に突き刺さる。さすがはクリスだ。魔法の威力も一級品。

フィラ達もエンシェントドラゴンに向かって飛びかかっていた。誰の目にも恐怖はあるが勇気を振り絞り地面を蹴っている。

今、エンシェントドラゴンとの戦いの火ぶたが切って落とされた。

第十一話 最弱の力（前書き）

レイの能力が切り札です。

第十一話 最弱の力

フィーナの手にあるオリジンがエンシエントドラゴンの翼を大きく切り裂いていた。向かってくる尻尾の攻撃に対しては上手く飛び上がって回避する。そこにクリスの魔法が殺到する。

エンシエントドラゴンの体に突き刺さる魔法。

『貴様！』

エンシエントドラゴンがクリスを狙う。だけど、その前にガイウスが立ち塞がる。

どう考えても無謀な行為。でも、ガイウスのはとある必殺技がある。

「全てを受け流す。八陣流『不破』！」

ガイウスはその手にあつた剣を落とし、エンシエントドラゴンの突撃に対して拳を放った。その拳とエンシエントドラゴンがぶつかった瞬間、ガイウスの後方を逆Vの字のように衝撃波が走った。だけど、それだけで終わる。

これにはフィーナもエンシエントドラゴンも目を見開いて驚いている。

ガイウスの使う古武術である防衛の拳である八陣流。その中でも不破はあらゆる威力を受け流す。もちろん、それを極めていければの話だが。ガイウスは防御に関しては拳を使った方が強いといふかなり特殊な人物でもある。

そこに驚きながらも動きを止めなかったフィーナが背後からエンシエントドラゴンを切り裂いた。斬り裂いた部分から飛び散った血が一気に凍結する。

『貴様ら！』

エンシエントドラゴンが回転するように身をよじった瞬間、フィラとリークがクリスとガイウスを連れて後ろに下がっている。リークが即席で考え出した攻撃の仕方だ。

「氷の結晶36。光の名の元にその力を開眼せよ！」

ガイウスを救出しながらもリークは魔法を唱えるのを忘れない。クリスのレベルになると詠唱をなくしてもかなりの威力が出るが、一般人は詠唱をなくせば魔法はほとんど発動できない。

リークの唱えた魔法が力となり、周囲に浮かんだプリズムが光を収束してエンシエントドラゴンの皮膚を焼く。

「大地の塊99。その力の名の元に、全てを呑み込む力と成せ」

それに応じるようにクリスも魔法を唱える。その瞬間、大地からせり出した槍がエンシエントドラゴンの体を貫いた。

クリスの魔法は相変わらず半端ない。とくに、詠唱を加えたなら。

だけど、相手も相手だ。土の槍で貫かれても、光で焼かれても、そこには傷口がふさがっていくエンシエントドラゴンの姿があった。はつきり言うなら桁違いもいいところだ。桁がかなり違いすぎる。

ただ、オレの目についているのはフィーナが斬り裂いた傷口。そこは回復せず、凍ったまま。エンシエントドラゴンはその体に炎を溜めこんでいるんじゃないのか？ ドラゴンは基本的にそうだと聞くし。

『ぬるい。ぬるいな。そんな攻撃では私の体に傷一つもつかない。さあ、彼らの様にどう殺そうか』

エンシエントドラゴンの視線が向いた先には無残にもひき肉にされた冒険者の人達。クリス達みたいにチームプレイに走らなかつたらあつという間に殺された。

今の言葉を考えると、凍らされたことには気づいていないみたいだな。

いつの間にか獣人族の姿もない。まあ、普通は逃げるだろうな。

『矮小な人間はやはりかみ殺す方がいいか？』

「くっ、どうしようもないのか」

ガイウスが小さくつぶやいた。それにはオレも賛成に近い。まあ、思いついた作戦があることにはある。でも、それはフィーナと、そして、オレの身をとて危険にさらす。とくに、フィーナはもしかしたら死ぬかもしれない。それだけは嫌だ。考える。最弱の力しか持たないオレの力でものを考える。

「風雪舞うその刹那」

その時、フィーナの声が高らかに響いた。魔法の詠唱の響きじゃない？

「全てを凍らす力の源」

フィーナのオリジンが輝いている。まるで、フィーナの言葉に歓喜しているように。

「時をも統べるその名を今ここに開眼せよ！ 我こそは氷の申し子なり！ 氷王具現化！」

その言葉が周囲に響いた瞬間、時が止まったような感覚に陥った。何故なら、いつの間にか周囲が氷におおわれているからだ。今まで普通の森の中だったはずなのに、そこには氷がたくさんある。それに右手が触れているが、その氷は全く冷たくない。

『貴様、まさか、魔術が使えるのか！？』

「トキヤの忘れ形見。氷王降臨！」

その言葉と共に周囲の氷が一齐にエンシントドラゴンに向かって放たれた。それはエンシントドラゴンの体に突き刺さり氷漬けにしていく。それはまさに魔法とはかけ離れた攻撃に思えた。

エンシントドラゴンの体のほとんどが氷に埋まる。凍っていないのはオリジンによって切り裂かれた背中の部分だけ。

「これで、終わりー！」

フィーナはそう叫び跳び上がった。そして、その部分にオリジンを

突き立てる。エンシエントドラゴンの体を完全に氷が覆い尽くし、そこにいた誰もが勝ったとそう思った瞬間、エンシエントドラゴンの体を覆う氷が砕け散った。

「えっ！」

フィーナの体ぬ向かってエンシエントドラゴンが無造作に腕を振る。そして、フィーナの体はまるでゴミの様に吹き飛んで木に激突した。

「がはっ」

そのままフィーナが動かなくなる。死んだわけじゃないと思う。かすかに胸が動いているのがここからでもわかるから。

だけど、完全にどうしようもない状況だった。

『さすがの我でも全てを原初の氷に包まれたならかなりまずかったが、魔術が使えるの貴様だけではない。残念だったな。貴様の剣は認められたもの以外を体の内部から凍らせる剣。もう、我にダメーシを与えることは出来ない』

そう言つてエンシエントドラゴンが笑みを浮かべた。完全な万事休すのはずなのにオレの思考は落ちついていた。

今、エンシエントドラゴンは何て言った？

残念だった、だ。自分の背中に突き立てられたオリジンを挙げて残念だと言った。つまり、そこがあいつにとっての弱点なのだろう。

そして、オリジンはフィーナ以外を内部から凍らせる。多分、魔法が体に作用するのだろう。

クリス達は何もできない。いや、エンシエントドラゴンが睨みつけているから何も動けない。動けば殺されるとわかっていているから。もう、この場はエンシエントドラゴンが支配していた。フィーナは動けず、クリス達は睨みつけられ行動できない。

でも、オレはどうだ？

エンシエントドラゴンの意識の外にあるオレなら出来るんじゃないか？

やるしかない。最弱がなんだ。戦闘能力がないのがなんだ。この場にはオレにはオレしかできないことが残っている。死ぬかもしれない。でも、それを恐れて、大切な仲間を見捨てられるか。

クリスがオレの視線に気づいた。そして、目で小さく頷く。

「あなたは、何なのですか？」

『小娘、それを聞いてどうする？』

クリスの質問にエンシエントドラゴンが愉快そうに笑みを浮かべた。

「死ぬ前に聞きたかったのです。フィーナさんは知っているようですが、私達は知らないのです」

『そうか。そうだな。なら、武器を捨てる』

オレはゆっくり立ち上がった。それと同時にみんなが武器を捨てる。

誰もがオレに視線を送って。

『捨てたな。では、話してやるう。我はエンシェントドラゴン。ドラゴンの上に位置し、神に並ぶ至高の存在。人の身で抗ったとを後悔するがいい』

「誰がするかよ！」

オレは叫んでいた。そして、エンシェントドラゴンの背中を蹴りオリジンの柄を握り締める。エンシェントドラゴンは首だけオレの方を向き、そして、目を見開いた。

まずは毒で死んでいないこと。そして、内部から凍らされていないこと。オレはオリジンの柄を握り締め、そのまま体重を乗せてさらに突き刺した。

オリジンが面白いようにめり込む。

『貴様、何故！』

「人間様を舐めるな！」

そのままさらにオリジン突き刺した。

『ふざけるな！』

エンシェントドラゴンが体を振る。その瞬間、オレは空中に放り出されていた。そして、尻尾が迫る。

回避する時間はなかった。

エンシエントドラゴンの尻尾がオレをかする。助かったように思った瞬間、オレの体は勢いよく地面に叩きつけられていた。かすっただけでこの威力。フィーナはどれだけの恐怖と戦っていたのだろうか。

『死ね!』

凄まじい痛みと共にゆっくり目を開けると、エンシエントドラゴンが口を開いていた。でも、オレの顔には笑みを浮かんでいただろう。

「チエックメイトだ」

痛む体をこらえて言葉を吐き出す。よく昔フィラとやったチエスの最後に言う言葉をエンシエントドラゴンに告げた瞬間、エンシエントドラゴンの背後で氷が舞った。

オレが笑みを浮かべた理由、口元に血で赤くなったフィーナがオリジンに向かって一直線に飛んでいたからだ。そして、オリジンを握り締めて一閃した。そうなのだろう。

エンシエントドラゴンの体が止まる。そして、その体は内部から凍りついていった。そして、エンシエントドラゴンの体が完全に凍りつき、砕け散る。

その光景を綺麗だと思いつつ、オレの意識は闇に落ちていた。

第十一話 最弱の力（後書き）

八陣流について

防御特化の武術。基本的にカウンターが多いものの不破のような究極防御を持つなど極めた場合の効果は極めて高い。ただし、こちらから攻撃することがないため決め手に欠ける。

第十二話 王都に（前書き）

久しぶりの投稿です。新たな未来を求めての調子が良かったのでこ
ういうことになりました。

第十二話 王都に

荒野。

今、オレが見ている光景を表す二文字としてはもっとも最適なものだろう。

焼け野原というのも間違った表現ではない。それほどまでにこのこは何も無かった。いや、何も無いわけじゃない。

荒野の中にポツンと立つ何か。何か、じゃない。女の子だ。青みがかかった白い長い髪。まるで、かかとまであるのかと疑ってしまう長い髪。

女の子が泣いている。その側には何本か存在する様々な形の武器。だけど、それが光の粒子となって消え去っていく。

女の子がそれを掴み取るように手を伸ばすが届かない。当たり前だ。相手は光。そんな実体の無いものを掴み取るなんて夢のまた夢。

「止めて！」

少女が泣いている。いや、口を開いていない。だけど、声は聞こえる。

「もう、私の大事な人を奪わないで！」

その声にオレは目を開けていた。その時にようやくあの時の女の子がいた世界が夢なのだとわかった。そして、目の前にはクリスとフ

イーナの姿。

「クリス？ フィーナ？」

「「レイ！」」

二人の声が重なる。オレはそれを夢見心地で聞いていた。そして、思い出す。オレ達が戦った相手のことを。

「エンシェントドラゴン、エンシェントドラゴンは？」

「私が、倒した、から」

フィーナが瞳の端に涙を作っている。クリスに至っては我慢すらしていない。でも、心配してくれる人がいるって本当にありがたいな。すると、近くからため息が聞こえた。

「久しぶりに起きたと思えばいきなり女か。羨ましい」

「そっちこそ、モテモテだった、じゃないか。っく」

ガイウスの声に起き上がろうとするが痛みあまり起き上がれない。だけど、それをこらえて、

「止めておけ。迷惑だ」

その言葉と共に手が払われた。そして、そのまま倒される。

ガイウスって本当は優しいからな。オレが女だったら絶対惚れてる。

「無理はダメです。レイは一週間眠っていましたから」

「一週間、も？」

つまり、あの日から一週間経っているのだろう。あれから何日かは経っているだろうなと思っていただけで、予想外通り越して想定外だ。

「魔法も効かないし魔術も効かないし、レイが死んだら私はどうすればいいの？ せっかくの初めての人だったのに」

「貴様！ 彼女に一体何をした！」

「これってオレの体質が怒られているよな！？ オレが何かしたか！？」

見にも覚えもありません。というか、初めての人の意味ってあきらかにオリジンで傷がついても死なないという意味だよな。

まあ、ガイウスからすれば色々と許せないかもしれないが。

「知らん！」

「そんな誇らしげに言われても。ところで、フィラとリークは？」

「お二人なら今買い物に出かけています。これからのこともありませんし」

「これから？」

一週間も寝ていたからか状況が全くつかめない。一体、これからどうするつもりなのだろうか。

オレの言葉にクリスが頷いた。

「はい。これから、王都の医者にレイを見せようと思っていましたが、起きたなら馬車の必要ありませんよね」

「ですが、さすがに王女がここにいるのは危険ではないかと思いません」

ガイウスがクリスに向かって敬語で言う。それにオレも頷いた。

クリスから受けたクエストはすでに終わっている。その結果がフィーナだし、クリスもフィーナと仲良くなったから離れたくはないだろう。

「オレもガイウスに賛成だ」

「レイ」

「今回のクエストは終わっている。確かに、今は連れが倒れたからという理由でここまで残れるけど、そろそろ国王陛下が心配すると思う。だから、一度戻ろう」

「一度？」

クリスが不思議そうに首を傾げた。それに対してオレは頷く。

「そう。国王陛下は尊敬できる人だからクリスが帰らないことで心労を与えたくない。だから、一度国王陛下とじっくり話して。クリスが何をしたいのかを」

このまま新たなクエストを受けるという手段もある。ドラゴン狩りについては理由は後付けで可能だ。フィーナがココロダ山の原因となったか調べるためと言っていい。

だけど、それ以上は駄目だ。

「だから、国王陛下がお許しになったなら、また一緒に旅をしよう」
王都に帰ればクリスは一度戻る。だけど、オレはまたクリスと一緒に冒険がしたい。クリスやフィーナと一緒にいた期間は短いけれど楽しかったから。

「そう、ですね。お父様にしっかりお話をしないと。わかりました。お二方の言葉を受け入れます。そうと決まれば善は急げですね。すぐに向かいますよ」

「ちょっとは余裕を持った方がいいけどな」

オレは小さく息を吐きながら近くにあった自分の剣を手に取り、

「あれ？ 軽くなってる？」

鞘から引き抜いてみた。そこにあったのは新品同様の輝きを持つ片手剣。ただし、その色は若干青みがかっている。

「私が打ち直したの。レイの剣だから全力でやったらすごいのが出

来上がった「

見た目はただの青みがかった剣かもしれない。だけど、持っているだけでわかる。軽い割にはかなり重い武器であるということ。

オレはその剣を鞘に収めた。

「とりあえず、フィラとリークが帰って来るまで待とう。詳しい話はそれから」

「賛成」

二人の声が重なる。まあ、この二人も同じように言うと思ったけど。

「馬車の予約をして来てみれば、まさか、レイが目を覚ましたとはね。王都戻るのは賛成よ。新しい大口のクエストが近々発表されるらしいから」

「大口のクエストだと」

ガイウスが絶句している。そりゃそうだろう。大口のクエストなんてまず出ない。ドラゴン退治と同じく危険性が極めて高いからだ。それに、大口のクエストは内容がすごいというより依頼者がすごいということにある。

大口のクエストは基本的に上級貴族以上の人が出すものだ。もちろ

ん、クリスのも大口のクエストである。

「まあ、噂よ噂。だけど、冒険者としては見るしかないわ」

「レイ、大口のクエストって？」

この中で唯一そういうことを知らないフィーナが首を傾げてくる。まあ、普通はわからないだろうな。

オレはどう説明しようか一瞬悩んで小さく頷いた。

「基本的には上級貴族が依頼するクエストで、クエストの中でも達成率が低く、成功した時には莫大な報酬がでるものかな。まあ、基本的には選考でオレみたいな奴やフィラ達みたいな駆け出しは落ちる。ガイウスがいいところ行くんじゃないか？」

「当たり前だ。だが、最終選考には残れない。しかし、フィーナなら可能ではないか？」

確かに、ガイウスですら反応出来ないくらい速いフィーナなら普通に最終選考に残れるだろう。

でも、フィーナは絶対にしないだろうな。

「私は、レイとクリスが一緒じゃないとやらないかな。自分で戦うのではなく、誰かを守るために今は使いたいから」

「そうか。なら、いい」

ガイウスはそう言いながらそっぽを向く。ガイウスって貴族につい

てバカにしなかつたら基本的には優しい。

特にオレに対しては難しいクエストをかすめ取るくらいだ。確かに、目標達成は難しいけどさ。

「じゃ、王都に向かうということ。大口のクエストならオレも気になるしな。見るだけはタダだ」

「それを言っていて悲しくなりません？」

「なる」

なるに決まっているだろう。だけど、大口のクエストなんて受けることはまず出来ない。だって、それが団体じゃなければオレでは不可能だ。

「フィラ、馬車はいつ使えるの？」

「明日よ。だから、あんたはちょっと休んでなさい。ただでさえ戦力にならないから」

「ひでえな」

オレは苦笑を浮かべた。それに対してみんなは笑みを浮かべる。

大口のクエストってどんなものが出ているのかな？

第十三話 道中

いい匂いが周囲に行き渡る。オレはそれを感じながら大きく息を吸い込んだ。ついでに大きく体を伸ばす。

すでに空には星が煌めき周囲を暗闇に染めている。オレ達がこうしていられるのもクリスの作った光球のおかげだ。

「そろそろ出来そうかな？」

「うん。大丈夫だと思うけど、よし。クリス、味見をして」

「わかりました。うん。大丈夫です。これならレイも喜びますよ」

「やった」

フィーナが小さくガッツポーズを取る。それを見ながらクリスは苦笑していた。

ちなみに、ガイウスとリークの二人は眠っている。馬車の中で順番に眠っていたからだ。

ちなみに、フィラだけは近くの木の下でいじけている。まあ、オレ達が必死で止めたからな。オレとガイウスとリークの三人が。

オレはフィラに近づいた。

「フィラ、そろそろご飯だよ」

「レイは話しかけないで。どうして私にご飯を作らせてくれないのよ」

「だって、フィラがどれだけ味音痴かオレ達はわかっているし、薬草を収穫するように言ったら毒草を収穫したよね？」

フィラは戦闘に関しては凄い働きをする。ガイウスですら攻撃だけなら世界でも通用するかもしれないと言うほどだ。スピードを最大限まで使った加速は本当に速い。ただし、フィーナからすれば遅いらしいけど。

そのフィラの最大の決定が料理と野草の選別だ。特に、薬草と毒草は確実に失敗する。

だから、単独での行動の時によく野草と毒草を間違えていたり、食べていたりもしていた。さらにはフィラの作る料理が凄い。簡単に言うなら食べられない。甘いとか辛いとかではなく、表現のしようがない味が合わさりまずさだけが引きたてられる。

そんな料理を食べたことがあるオレ達は全力で反対した。

だって、三日三晩病院のベッドの上で腹痛のあまりのたうちまわっていたんだぞ。そんなもの食べなくなるわけ無いじゃないか。

「いや、だって、あれはその、えっと、偶然だって」

「偶然？ はあ、わかったわかった。とりあえず、大人しくご飯を食べようよ。みんなと離れていても魔物の危険性もあるしね」

「わかっているわよ。でも、魔物くらいなら私一人でどうにか出来

るわよ。後、あなたの剣があれば」

確かにそうだ。オレの剣があればどうにかなると言うのも少し怖い。

道中に出会った魔物の攻撃を受け止めた際、スパツと切れたのだ。魔物の腕がスパツと。

切れ味が良すぎる。

「あなたの剣は本当になんなのかしら。私のナイフも加工してくれたいのに」

「多分、フィーナがしないかな。でも、オレからすればかなりもったいないものだけどね。でも、フィーナが頑張って鍛えてくれた剣だから大切に使わないと」

「ふーん。ところでさ、レイって誰のことが気になっているの？」

その言葉に僕は首をかしげる。フィラは一体何を聞きたいのだろうか。

「だから、レイは誰のことが好きなの？」

「す、好き!？」

僕は思わず叫んでいた。その言葉にクリストフィーナが振り返るのがわかった。フィラは呆れたようにため息をつく。

「簡単な話よ。ほんの少し前まで女性い比率が著しく高かったのよ。だれかに好意を寄せていてもそれは不思議ではないわ。で、誰のこ

とが好きなの」

「それは」

オレは言葉を詰まらせる。

まあ、そう言う感情が無いわけでもない。これでもオレは普通の男だ。クリスやフィーナに行為は抱いているけど、そう言う感情は未だに、

その時、甲高い音が鳴り響いた。文字で表すなら、キーンという耳が痛くなる音。この音は確か、

「ヘルゲスの、魔笛」

耳を押さえ顔をしかめながら言う。甲高い音だけならいいのだが、ヘルゲスの魔笛には一定時間体内にある魔力回路が正常に動かなくなるという特殊な状態異常がある。もちろん、それはクリスのような魔法使いにとっては本当に天敵だし、フィラのような近接戦闘を行う戦士であっても近接戦闘用の身体強化魔法の発動が出来ないため動きは普通に落ちる。

つまり、この場でいつも通りに動けるのはオレ一人。

オレは腰の剣を引き抜く。青みがかった刃が煌めき姿を現した。場所、

「あっち！」

フィラが指差した先に向かってオレは駆け出した。そして、背丈が

高い草むらに向けて剣を振る。

何かが当たったような感触と共に剣を振り抜いた。

それと同時に甲高い音が無くなり、何かが飛び出してきた。

煌めく何か。体を捻りながら必死に避けようとして左肩に痛みが走った。

相手の鋭い鎌がついた腕に切り裂かれたらしい。相手はプダスタか。

「こんにゃろ」

すかさず右腕を動かしてプダスタの昆虫のような顔を切り裂く。飛び散る体液から傷口を守りながら後ろに下がった。

「レイ！」

フィラがナイフを抜いて駆け寄ってくる。だけど、ヘルゲスの魔笛がないからよくわかるが、囲まれている。

「嘘。魔物がこんなに集団行動をするなんて」

「何が起きた！」

オレがフィラと一緒に後ろに下がるとガイウスとリークが飛び起きていた。

クリスとフィーナはまだ魔笛から立ち直れていない。

「ヘルゲスの魔笛！　すぐさま密集して！　囲まれている！」

オレの言葉と共に周囲から音がする。それはありえない光景の始まりだった。

「嘘でしょ」

フィラの声から言葉が漏れる。それはオレ達も同じだった。冒険者だからこそ習った。

魔物は絶対的に数が少なく、人里離れたような場所にしか住まない。そして、基本的には単独行動。そして、魔物と魔物が協力することは少なく、決して、別種類の魔物は協力しない。

だが、そこにあつた光景はフィラの言葉が正しいだろう。

「プダズタにアリオカ、ユゲン、ゼフタ、セルゲス。おいおい。レイ、全てが実は同じ種別はないのか？」

「残念ながら、貴族様の期待には乗れないな」

「貴様、後で八つ裂きにする」

目の前の光景はそういうものだった。

様々な姿をした魔物がオレ達を囲んでいる。こちらに向かって様々な音を立てながら。対するオレ達は未だに魔笛の影響を受けている。

「レイ、私が前に入る」

フィーナがオリジンを引き抜く。だけど、その動きはどこかぎこちない。でも、今はフィーナに頼らないといけないかもしれない。

それでもオレは、

「フィーナは援護を。オレが前に出る」

「貴様、正気か!？」

ガイウスの言葉。それを聞きながらオレは剣を構えた。

「この中で魔法に頼らず戦える人は？」

オレの質問に誰も答えない。口を開いても手を挙げる事が出来ないから。ヘルゲスの魔笛は食らえば魔法が使えない。だけど、ヘルゲス自身は草食。魔物というより巨大な昆虫の方が近いかもしれない。

「だったら、オレが前に出る。フィーナとクリスは回復次第、援護を」

「それなら僕も出るよ」

リークが両手で盾を構えながら前に出る。身体強化魔法が無ければ満足に盾も構えられない。

「二人なら、大丈夫じゃないかな？」

「頼りになるよ」

剣を握りしめる。それと同時に魔物が動き出した。だが、その瞬間、何かの鳴き声が響き渡る。

動きを止める魔物。そして、背中を向けて走り出した。

オレ達は呆然とそれを見ることしか出来ない。

「何が、起きたのですか？」

クリスの言葉に視線がオレに集中する。確かに、学校時代はよく図書館にいたけど。

オレは首を傾げた。

「魔物の統率個体がいるかもしれない。今まで考えられていた単独行動をする魔物を束ねる統率個体が。よくわからないけど、今の鳴き声には絶対関係がある」

「そうね。ありえないことだからこそ、ありえない存在がいてもありえないことはない。はあ、一体どうなっているのよ。わけがわからない」

「報告した方がいいかもしれませんね。お父様にこのことを」

「みんなー、ご飯出来たよ」

フィーナのその言葉にオレ達はずっとこけていた。フィーナは不思議そうに首を傾げている。

それを見たオレは思わず笑い出した。それにクリス、フィラと続き

ガイウスやリークも笑い出す。

ただ、フィーナー人だけが不思議そうにしていた。

「そっだね。ご飯にしよう」

オレは笑いを少しこらえながら言う。その言葉に、その場にいた誰もが頷いていた。

第十三話 道中（後書き）

魔物について

この物語の魔物は大半が大きくなった昆虫の姿をしています。例えば、ヘルゲスはコオロギが大きくなった姿です。いつかGの魔物も登場させる予定です。

幕間 光と闇と表と裏（前書き）

息抜きに書いて久しぶりに投稿しますが、『新たな未来を求めて』
を読んでいる人がいるならそこに出てくる人物が何人か出ています。
読んでいない方はそういうキャラがいるんだなと自己完結していた
だいて結構です。このデイバインナイツの物語は星語りがある程度
（自分の中では前中高の前編）進んだところで『デイバインナイツ
〜光と闇の剣士〜』に物語が移って、それが半分くらい進んだと
ころで『デイバインナイツ〜二人の英雄〜』に移る予定ですので、
長い目で見ていただければと。
ですから、物語は二人の英雄から始まって光と闇の剣士に繋がり、
星語りで終わる予定です。逆からスタートしていたのは最弱の主人
公を書きたかっただけのなので。

幕間 光と闇と表と裏

まるでカマキリを大きくしたかのような姿。はっきり言うなら気持ち悪いとしか言えない。

そんなカマキリもどきに対して雪羽せつわの持つフィアーランスが貫いた。

「姫路ひめじ！ 後ろに下がって！」

「私は大丈夫だから！」

そう言いながら向かってきたバツタの大きくした姿の相手に向かって手に持つ黎帝れいていを振り切る。バツタのような何かを吹き飛ばした私はすかさず黎帝を振り上げた。

「光よ」

黎帝の先に光が集まる。その光は巨大な刃となり、私はそれを振り下ろした。バツタのような何かの体を両断する。両断すると同時になんかの体液が噴き出した。

私の顔が引きつる。

「姫路さん！ 驚いて突っ立っていないでください！」

私の頬を魔力によって形取られた矢が通り過ぎる。振り返ると、そこにはカマキリのような何かの四体、テオ口の放った矢によって貫かれていた。

私は振り返りながら童顔の少年に礼を言う。

「テオロ、ありがとう」

「戦いは終わっていませんよ！」

私はすかさず振り返り、最前線に目を向ける。そこにいるのは白と黒の剣士。

純白の服に身を包んだギルバート君と、漆黒のプレートアーマーを身につけているクロハの二人。それぞれの手には正反対の色の武器が握られている。

ギルバート君の手には漆黒の刀が。クロハの手には純白の刀が。

「敵の数が多い！ これ以上止まっていたら勢いに押されるよ！」

響き渡るギルバート君の声。それに対して私は小さく頷いた。

「わかった、慧海には悪いけど、このまま前に突っ込む！」

「姫路？ 正気？」

私が黎帝の先で殴り飛ばしたカマキリを雪羽がしっかりとファイアランスで貫く。そして、私の横に着地した。雪羽が下がったことでテオロが前に出ている。

「正気も正気。攻撃は最大の防御って言うでしょ。全力前進で相手を砕いて行けばいいのよ」

「はあ。相変わらずの突撃思考。姫路、今は慧海君も朱雀ちゃんもいないんだよ。ここで突撃すれば」

「大丈夫。あいつは絶対に来るから」

私の言葉に雪羽が小さくため息をつく。ギルバート君やクロハが前に出ているとはいえ、いくらでも湧き上がってくる敵を相手に押さえていることは難しい。現に、だんだん二人は押されている。いくらコンビネーションが良くても、クロハは重装甲だし、ギルバート君は軽装甲過ぎる。長期決戦には向かない。テオロの体力も気になるし。

「私が黎帝の力を最大限にして突っ込む。運がいいのかわからないけど、黎帝の光刃に対して相手は弱いみたいだから。真正面からぶった切っていけばいい」

「いつから慧海君みたいな思考になったのかな？」

雪羽がまたため息をつくけど、それはちょっと失礼じゃないのかな？

私は黎帝を肩に担いだ。雪羽もファイアランスを構える。

「準備はいい？」

「いつでも」

見なくてもわかる。雪羽は頷いている。雪羽もわかっているだろう。私の考えを。だって、私達は白百合姫路の表と裏なのだから。

私達が同時に地面を蹴る。タイミングを合わせる必要はない。だっ

て、タイミングを合わせなくてもタイミングは同じになるから。

「ギル！」

クロハが私達に気づいて声を上げる。それに同調するように二人は同時に後ろに下がった。かわりに出てくるのは私達。

黎帝を握り締め。振り上げる。

「光刃よ、斬り裂け！」

「ランス、ツヴァイ！」

私の振り抜いた黎帝と、ファイアランスから放たれた光が、昆虫を巨大化した群れに突き刺さり、吹き飛ばした。

だけど、敵はどんどんやってくる。

「光刃よ」

「ランス」

私達は同じ技を放とうと身構える。何度来ようと倒して見せる。それが私達だから。

「ったく。無茶だけはするなと言ったはずなんだけどな」

その時、声が聞こえた。その声は私達にとって特別で、そして、最強の味方の声。

それと共に舞った。何が？ そんなの決まっている。群がってきている相手の体の一部が細切れになって舞った。

立った一撃。一撃だけで相手の軍勢の約半数の命が消え去った。攻撃はそれだけでは終わらない。一撃が直撃した群れに今度は風の刃と大地の鳴動が襲いかかる。避けられる術はない。

私は黎帝を下ろした。雪羽もファイアーランスを下ろす。それと同時に私達の前に馴染みの深い青年が着地した。

「よっ。遅れて悪かったな」

「遅いわよ」

「ふふっ。はい。遅いですね」

私と雪羽は笑う。嬉しいから。少し、照れ隠しの気持ちも込めて。

「魔物、って言うらしいな」

慧海の言葉が僕達の耳に入ってくる。その名前なら聞いたことはある。確か、慧海達の世界にいる世界からの侵略者の名前だった。

「魔物？ こんな昆虫見たことないわよ」

「そうですよね」

「ただ、それは姫路さんと雪羽さんが否定した。僕の中でその存在がわからなくなる。」

「じゃあ、この存在は何かな？ 僕の世界でも小さい奴はいても、大きい奴はいなかったのに」

「ギルの疑問はもつともだ。というか、オレ達の世界にもいない。まあ、それが大量発生しているみたいだな」

「どこ有害虫ですか？」

「テオロの口元が引きつっている。その気持ちはわかる。でも、害虫呼ばわりは少し失礼じゃないかなとは思っただけ。」

「今のところ、この世界を詳しく調べるのは後回しにして、先に襲いかかってくるこいつらの駆除をした方がいいかもしれない。いつか、Gの巨大な存在が出てくるかもしれないし」

「その言葉に世界が止まった。いや、世界の時が止まった。これは過言ではなく事実だ。」

Gの存在。ということとは、ゴキ

「それ以上は思ってはダメ思わないであんな太郎さんが大きい存在で出てくるなんて生理的に受け付けられないんだけど」

「僕の口はクロハによって塞がれていた。その気持ちはわかるけどね。」

「まあ、話によれば討伐すれば賞金も出るらしいし、いっちょ頑張

ってみようかって」

僕はクロハの手を剥した。

「それなら賛成かな。僕も、人民が困っているのは見過ごせないし」

「決定だな。じゃ、とりあえず街に向かおうぜ。久しぶりに宿でも止まりますか」

慧海が歩き出す。それを追いかけるように僕達も歩き出した。腰に身に付けた僕の光と闇の象徴を見る。

本当にここがああ場所なら、僕達はもつと悲惨な戦いに巻き込まれていくだろう。でも、戦わないといけない。僕がこの光と闇の伝承を持っていく限り。

「久しぶりに宿は、みんなで雑魚寝が出来る場所だったらいいな」

だから僕は、無邪気に笑みを浮かべた。

幕間 光と闇と表と裏（後書き）

幕間のメンバーは少しお休みして次からはレイ達が普通に出ます。
いつ更新するかわかりませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2581t/>

ディバインナイツ ~ 星語りの物語 ~

2011年11月14日01時45分発行